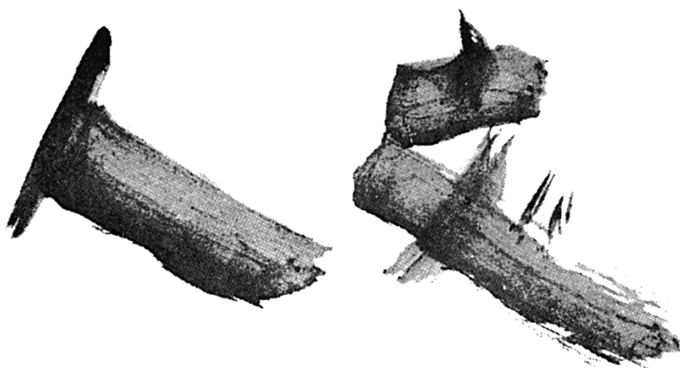




第七一号



2024

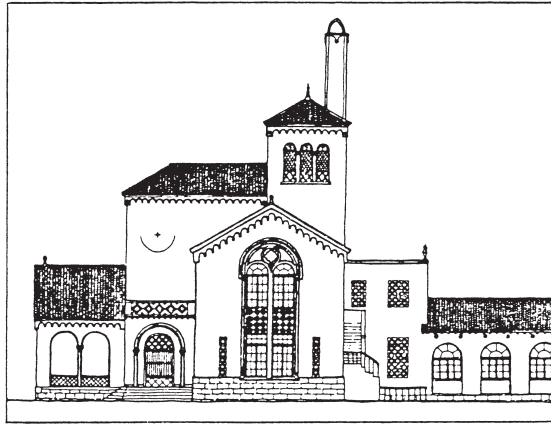
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第七一号

2023年4月—2024年3月

も く じ



随想

人文研退職にあたっての感想

佐藤 淳二

講演

夏期公開講座 名作再読15

インド哲学から再読する『意識と本質』（井筒俊彦）

石牟礼道子『椿の梅の記』のなかの恵みときしみ 船山 徹

世界史を紡ぐ『危険な言語』——エスペラントの魅力を探る 酒井 朋子

講演会ポスターギャラリー—二〇二三— 都留俊太郎

彙報

共同研究の話題

ある研究班員の執念 石川 禎浩

盗賊の供述調書からリサイクル社会を考える

——共同研究が育んでくれる史料を読む力——

科学論がメディア論と出会う場所 岩城 卓二

疾病という「うづしほ」の只中で 岡澤 康浩

虎溪山漢簡「食方」読書会 香西 豊子

「社交」の女神 高井たかね

所のうち・そと 高階絵里加

大洪水の前に

南砺紀行 菅原百合絵

昭島のおいしい水と出汁 福家 崇洋

京都と私 守岡 知彦

書いたもの一覧 李 媛

人文研退職にあたっての感想

佐藤 淳二

人文研には二〇一七年に着任し、その後五年間は大学院環境学堂（環境・技術存在論分野）を兼担し、二〇二四年三月をもって定年退職した。比較的短い時間ではあったが、十分に濃密な時間を京都で過ごさせていただいたという感があり、京都大学でお世話になった多くの方々に感謝したい。

人文研着任後、多くの共同研究や企画に参加したが、その皮切りに思えるのが、藤井俊之著『啓蒙と神話・アドルノにおける人間性の形象』（航思社）と上尾真道著『ラカン 真理のパトス 一九六〇年代フランス思想と精神分析』（人文書院）の二冊の重要な書物をめぐってのダブル書評会であった。委細はさておき、これ以降常に、啓蒙と理性の問題に関して考えることがこの人文研での時間の軸となったことは間違いない。この時から、とりわけホルクハイマーとアドルノが遺した『啓蒙の弁証法』（岩波文庫）が、私の念頭を離れることはなかった。それは京大人文研という環境と無縁のはずがない。いうまでもなく戦後日本のある時期において、京大人文研の存在は極めて



大きかった。戦後の民主主義を指導しようという熱気に溢れたその共同研究は、知的生産の技術や歴史観の提起の斬新さもさることながら、研究の倫理というか、共同性、コミュニケーション性、討議を重視する話し合いなどのスタイルを通じて、明らかに啓蒙のモデルを戦後日本に提供したと言えるだろう。

とはいえ、社会主義圏の崩壊や西洋の相対的低下と共に、ポスト植民地主義、フェミニズム、エコロジー運動などなどによっても、「近代」や「啓蒙」は、根源的な批判の標的となった。当然のことである。アドルノらの『啓蒙の弁証法』は、そのベシミスティックなまでの啓蒙像からして、現在のな啓蒙批判の嚆矢であり、初版一九四七年からずっと一種の予言の書だったと言っても間違いではないだろう。

ところで、この書物の冒頭は、オデュッセウスの航海を極めて巧みに比喩として利用している。周知のように、そこで語られていることは、一見すると支配と被支配、知と非知の鮮明な二項対立に見える。ところが、ホメロスの『オデュッセイア』第十二歌を見ると、オデュッセウスは、部下の船員たちに女神キルケの予言を打ち明けているのである。船員たちは完全に無知な機械のような漕ぎ手ではなく、これから向かう海には二人のセイレンの住む島があること、その声を聞く者は魅惑され死を免れない等々、全てをオデュッセウスの口から聞いて啓蒙されている。そこで合意された方策は、誰もが知るように、帆柱に縛り付けられオデュッセウスだけがセイレンの歌声を聞き、部下たちは蜜



蠟で耳を塞ぎ一切の声を遮断した状態でオールを漕ぐ作業に集中するというものであった。要するに、ホメロスの語るところでは、オデュッセウスの提案を受け入れた部下たちは、一種の漕ぐ機械となることに同意して危機を乗り切ったのである。

セイレンの挿話から、支配する者と支配される者たちの分業と統治の教訓を読むことは可能だが、そのような理解には到底収まりきらない要素が残るのだ。一方で、オデュッセウスただ一人が、セイレンの歌の途方もない快樂ないし死に直結した享樂を味わい経験している。他方で、部下たちは間接的には快樂や享樂を知りつつも、死の危険からの保護と引き換えに享樂を断念する。享樂と死を経験し知る者が一方にあり、その知を諦めるが、それと引き換えに安全を約束される者が他方にいるという区別、この両者の差異は、何かしら一般的社会契約なるものの本質、ひいては社会分業と統治の本質に関わるのかもしれない。この種の問いに行き着いたのも、ひとえに人文研に集った三十代四十代の若い人々の啓発と刺激のおかげである。重ねて感謝を感じつつ、いつの日にか新たな成果が得られる日が来ないかと、なおまだ密かに夢想しているところである。



講演



夏期公開講座

名作再読15 いま読んだらこんなに面白い

インド哲学から再読する

『意識と本質』（井筒俊彦）

船山 徹

三十種以上の言語を自在に操るイスラーム思想史家井筒俊彦（一九一四—一九九三）は、イスラーム思想を軸に、その西洋スコラ哲学への影響を示す一方で、東はインド・中国・日本に踏み込みアジア諸思想の基層を追究した。アラビア語の「本質」とその類似概念に着

目し、「本質」の問題性を手がかりにして、それが提起してきたいろいろな哲学的問題を論じつつ、東洋哲学全体を、その諸伝統にまつわる複雑な歴史的聯関から引き離して、共時的思考の次元に移し、そこで新しく構造化した論考こそ、『意識と本質』東洋哲学の共時的構造化のために』（一九八三年刊、一九九一年岩波文庫）である。

広大なアジア諸地域の思想を「共時的構造化」（歴史の変化や違いを超えて同じ構造をもつ哲学体系とする捉え方）によって統合できると考えた井筒にとつて、イスラーム思想は東西思想の結節点だった。そうしたイスラーム思想の根幹に位置するキーワードが、現代語の「本質」に当たるアラビア語「マーヒヤ」と「フウィーヤ」である。

マーヒヤ *māhiyah* は永遠不変の同一性を意味し、猫を猫たらしめる本性（猫らしさ・猫性）のような抽象概念である。一方、「これ性・これであること」を表すフウィーヤ *huwīyah* は、個体的本質、存在物の究極的実在性である。この二種は、「あらゆる事物に二つの次元の異なる「本質」が認められていた」ようなイスラーム思想の根本という。

（一）一般的意味の本質（マーヒヤ）は様々に言葉で言い表せる、他の事物と共通する性質、抽象的本

質

(二) 特殊の意味の本質(フウィーヤ)は「これ」としか言えない、見たまま聞いたままの性質、個的本質

これら二種に当たる言葉と理念は、時代と地域を越えて東洋の処々に様々に現れていると見た井筒は、中国の禪、十一—十三世紀宋代儒学、さらにはわが松尾芭蕉の俳諧論を挙げる。なかでも芭蕉の分析はあつぱれである。

さてここから先はわたくしの「ないものねだり」である。著者が、言語・文献の表層を越えた基層に向ける眼差しは恐ろしく鋭い。だが、それをしかと認めたうえで言いたい。わたくしには井筒の論述はもの足りない。なぜか。なるほど、アジアに通底する思想を解明する営為として、東洋思想の「時代を超えた構造化」を中国思想や芭蕉の俳諧で例示する様は見事と言うほかない。それにも関わらずしかし、である、本質の二義性からアジア思想を構造化するには、インドの古典学術語サンスクリット語の「本質」の分析が余りにも手薄ではないか。『易』『老子』『莊子』・禪・宋代儒学・芭蕉をイスラームと同じ次元で論じる者は世界広しといえども井筒しかいない。だが、同じ理由で、イスラームと中華の間に横たわるインド大文化への切

り込み方の甘さが目立つのだ。インド叙事詩『バガヴァット・ギーター』の分析、ヴェーダーンタ学派シャンカラやヴァイシエーシカ学派ブラシャスタパードの思想、大乘仏教ナーガールジュナの「空」の思想分析は力強い。しかしマーヒーヤとフウィーヤの二義性に対応する言い回しで弁別する思想ではない。

井筒俊彦が知る由もなかったインドのサンスクリット語文献で著者の考えと最もよく合う思想を紹介したい。すなわち七世紀インド大乘仏教の思想家ダルマキールティ Dharmakīrti は「本質」を意味するサンスクリット語「スヴァブハーヴァ svabhāva (物の本性)」に二義があるとし、当時その革新性がインド思想全体に波紋を投じたのだった。この本質二義説を主題に取り上げたウィーン大学のシュタインケルナー Ernst Steinkellner は、一九七一年、「ダルマキールティにおける実在と概念 Wirklichkeit und Begriff bei Dharmakīrti」を出版し (*Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 15, pp. 179-210)、「ダルマキールティにとって『本質』は文脈に応じて次の二つを意味することを解明した。

(一) 存在物に固有な、他の一切の存在と全く異なる性質・その独自の本質 *svabhāva* (『フウィーヤ』)。

言葉では「それ」としか言えないような、その存在物を、他の一切から切り離し、世界にただ一つの個

別として認識させる根拠

(二) 認識者の知性と協働することで、その存在物がある一定群の存在「牛」と同類と見なすと共に、別のある一定群の存在「馬」「羊」等から区別される異類と見なすことを可能にする根拠として、働くような存在物の本質 *svabhava* (『マハーバーヤ』)

同じ一つの存在物に、この二種の本質が具わる。井筒がもし仮にこのようなダルマキールティの本質二義論を知っていたらどうしただろう。井筒は快哉を叫び、本書の内容をより深く豊かで説得力に富むものとしたのではないかと、想像をかきたてられる。

石牟礼道子『椿の梅の記』の かの恵みときしみ

酒 井 朋 子

『椿の梅の記』(一九七六年)は、『苦海浄土——わが水俣病』(一九六九年)の出版から数年後に公刊された石牟礼道子の自伝的小説である。熊本県天草に生まれた幼い主人公「みっちゃん」こと道子は、ごく幼い時分に家族と水俣のはずれの村に引越してくる。時には父に連れられて、時には一人で、道子は近隣の海や野山を駆けまわり、あるいは地域の年中行事で忙しなく働く隣人たちの様子を見つめる。ときには気を病んだ盲目の祖母「おもかさま」があたりを放浪するのを、探して町を歩き回る。とりたてて物語の展開があるわけではない。おだやかな回顧録のような文章が、野山や海の春夏秋冬ごとの表情や、季節の恵みを利用した食べ物の味わい、そして地域社会の出来事や村の人間模様を描いていく。

幼い道子の記憶のなかに映し出されるのは、メチル

水銀化合物を含んだ工場排水により海が汚染される以前の水俣の姿である。少女は春の花の後に湧き上がる大地の匂いに、あるいは「天然のしとねのようにやわらかな」山の表土に「この世の成り立ちを紡いでいるものの気配」を感じとる。その筆致はゆたかな色彩や鮮烈な香り、そして山や海のさざめきの知覚に満ちている。

そのためかこの作品は、水俣病という甚大な汚染と被害が起こる「その前」の世界のハーモニーを描いているかのように紹介されることがある。たとえば民俗学者の赤坂憲雄は以下のように書く。「水俣病であれ、島原の乱であれ、石牟礼さんはくりかえし、日常の裂け目に噴出する不幸な出来事を描くと同時に、その出来事が起こる以前の地域共同体の日常のありようを、その幸福を同じ質量をもつて描こうとしてきたのではなかったか」（赤坂憲雄「くだもののお礼は、その先へ」『現代思想』二〇一八年五月号、四一頁）。

しかし『椿の梅の記』をよく読めば、そこに浮かび上がってくるのは必ずしも調和に満ちた幸福な故郷の姿ではない。少女の住まう町が、その地にいずれ破壊的な汚染をもたらす企業への依存を日ましに強めていること、その社会変容が差別的な構造を生み出していることが、記述のそこかしこにうかがえる。村に暮ら

す人々は、「みっちゃん」には暖かく接する一方、村落共同体にとつての「はずれ者」たちには冷淡な態度を向ける。たとえば道子をかわいがってくれる女郎屋の娘たちに対してだ。近くの貧しい漁村から連れてこられたかの女らを、村人たちは明確な悪意をもって「淫売」と呼ぶ。娘の一人が若い客の一人に刺されて死んだときにも、「小娘のくせに客をとりすぎた」と陰口が交わされ、雇い主は葬式すら出さない。そもそも、道子の家族が引越してきた「とんとん村」自体が、水俣の中でも「この世のはずれに出現した部落」として蔑みともに見られているのだった。

もともと道子の家族は、天草での事業の失敗にともない、水俣の「会社」の港や道路をととのえる作業を請け負うために移ってきたと記されている。そして道路と港がととのえば、人や物が行き交い、窒素肥料株式会社さらに事業を拡大させる。女郎小屋もその流れにあやかっけてひらかれている。道路や港の現場で働く青年たちと、女郎として働く娘たちは、ときには兄妹であり、あるいは漁村に残っていれば夫婦になっていたかもしれない若者たちなのだった。産業がもたらす社会変容のなかに、幼い道子の世界もまた埋め込まれている。

地域社会がそのように多面的に描かれている一方、

海・山・野・磯・川は徹底的に美しく豊かで恵み深いものとされていることも印象に残る。それはもしかして、人の営みが生態系や地質や気候に及ぼした影響の深刻さがはつきりと見えるようになった現代の環境観とは異なるものかもしれない。いま人が直面しているのは、荒々しく、暴力的で、人が生きることのできる空間をどんと脅かす自然のありようだからだ。

「季節変わりの風が光るとき、山嵐の音がごとくと空を渡る時、秋の山野の花穂の霞につつまれるとき、梅雨時の大濁流をみつめているとき」、「みっちゃん」は「深い未分化の世界」と呼吸しあい、「生命界のみなもと」を思う（一九六頁）。ではいま、二〇一一年の原発事故をはじめとする様々な環境汚染のなかで半ばミュータント化した自然を前にして、そのなかに混じりあい、その呼びかけに呼応する経験は、わたしたちを新しいどのような場所に連れていくだろうか。

世界史を紡ぐ『危険な言語』

—— エスペ란ートの魅力を探る

都 留 俊太郎

いま、学界でエスペ란トが静かなブームになっている。かくいう私も人文研に入所してから、一念発起して勉強しはじめた。もちろん、他に学ぶべきものがあるのでは、という声が四方からあがる。院生時代の二人の指導教官からは、「何の意味があるのか」、「全く非現実的」とのお言葉をそれぞれ賜った。英語万能主義のご時世では、致し方がない。しかし、かつて研究所には、島田虔次、梅棹忠夫というエスペランティストの優れた先達がおられた。きつと泉下の両氏によって、私はエスペ란トへ導かれたのだろう。

エスペ란ト運動史研究のなかで最もよく知られた古典が、『危険な言語——迫害のなかのエスペ란ト』（一九七五年刊）である。著者のウルリッヒ・リンスはドイツ出身の日本研究者で、原型となる論考は京都のミニ・エスペ란ト雑誌に掲載された。日本エスペ란ト協会の精鋭の尽力のもとで、近いうちに増補版

の日本語訳が刊行されるそうだった。その内容を一足先に紹介してしまおうというのが「再読」の趣旨であった。

「危険な言語」という題名はいくぶん奇を衒ったもののように見えるが、そうではない。エスペラントに託された理念と、実際にこうむった迫害の歴史に鑑みれば、むしろ腑に落ちるところがある。そもそも「エスペラント」という名称は、エスペラント(語)で、「希望する人」という意味である。民族・言語・宗教などによる反目を乗り越えるために創案された、中立的な国際語であるから、この呼び名は全くもって正しい。しかし、その理想主義的な傾向ゆえに、前世紀には世界各地で繰り返し弾圧された。むしろ危険な思想を帯びた言語として扱われてきたのである。希望の言語として花開くはずだったエスペラント運動は、どうして迫害されたのか。それは、エスペラントという小窓を通じて、世界の現代史を眺望する試みにほかならない。

ナチス・ドイツ、日本、中国における弾圧の記述もあるが、今もつとも読まれるべきは、スターリン体制下のソ連にかんする部分であろう。現在ではほとんど忘れ去られているが、かつてソ連は世界の左派エスペラント運動を牽引する位置にあった。エスペラントを利用した国際通信による労働者の連帯、資本主義国へ

の革命の輸出が展望されていたのである。そして、モスクワとともに運動の一大拠点となっていたのが、ウクライナであった。

ウクライナのエスペラント運動をリードしたV・コルチンスキーの活動にはとりわけ興味を惹かれるものがある。彼は、数多くの小説のエスペラント訳を手掛けたほか、ロシア・エスペラント語大辞典を編纂したことでも知られる。さらに、エスペラント・ウクライナ語辞書の編纂も目論んでいたというから、当時の最も卓越したエスペラントイストの一人であったと見てよいだろう。著者によれば、ソ連ではロシア人以外のエスペラントイストたちが、ロシア語の優位に対抗する手段としての役割をエスペラントに期待していたという。コルチンスキーは、エスペラントを媒介とした、諸民族の水平的な連帯を企図していたのではないか。

しかし、スターリン体制下において、海外との通信を柱とする運動に対しては、常に猜疑の目が向けられた。結局、一九三〇年代後半の激しいテロルのもとでコルチンスキーも含めて数多のエスペラントイストたちが命を落とした。運動は急速に衰退してしまったのであった。

さて、ウクライナのエスペラントイストたちの言論活動は、エスペラント通信を介して、同時代の日本・

こそ、あえて遠回りするような言葉に希望を託したい。

中国に届いていた。人文研の図書室には日本国内で刊行されたエスペラント雑誌が多数収められているから、私も手に取って見たことがある。すると、実にたくさんの記事が見つかり、驚かされた。ウクライナは思っていたよりもずっと身近な場所なのだ。そうした記事の多くは、ソ連のプロパガンダをなぞったものである。たとえば、コルホーズの華々しい成功が報じられる一方で、一九三二―三年の大飢饉については情報が伝わっていない。しかし、通信には見るべき成果もあった。中国語のローマ字化運動は、ソ連で先行していた運動の成果をコルチンスキーがエスペラント訳し、それに接した中国のエスペランティストが中文に重訳・紹介したのを契機とする。

そして、ここからは本の内容を離れて私の研究になるのだが、戦後台湾から日本に亡命し、台湾独立運動を牽引した王育徳という人物がいる。彼は、この中国語ローマ字化運動から大きな示唆を受けた。そして、台湾語のローマ字書記システムを開発し、台湾語の辞書まで編纂している。ここまで話をたどれば、エスペラントを重要な媒介としてウクライナと台湾の歴史はつながっていたことになる。

国際政治の隘路をさまよう者たちがつながらる言葉は、どこにあるのだろうか。近道に活路を見出し難いから



六月

[illegible]

講演会

ホスターギャラリー
二〇二三

五月



UNIVERSITY OF
KENTUCKY
College of Arts and Sciences
Department of Japanese Studies



UNIVERSITY OF
TOKYO
Faculty of Letters
Department of Japanese Language and Culture



UNIVERSITY OF
WISCONSIN
Department of Japanese Studies

KYOTO LECTURES

Tuesday, June 20th, 18:00h

Antonio Manieri
“Everyday
Uncertainties”
Sharing and Learning
Terminologies in
Eighteenth-century Japan

SPEAKER
Antonio Manieri is an Italian scholar of Japanese history and culture, currently working as a postdoctoral fellow at the Center for Japanese Studies, University of Wisconsin-Madison. He has published on the history of Japanese print culture, the history of Japanese bookbinding, and the history of Japanese book collecting. He is currently working on a book about the history of Japanese book collecting, which will be published by the University of Wisconsin Press in 2023.



Abstract
This lecture will explore the history of Japanese book collecting, which was a major cultural activity in the Edo period. It will focus on the role of the book collector in the development of the Japanese book market, and on the ways in which book collecting was used to create a sense of community and identity among collectors. The lecture will also discuss the ways in which book collecting was used to promote the study of Japanese history and culture, and to create a sense of continuity between the past and the present.



Abstract
This lecture will explore the history of Japanese book collecting, which was a major cultural activity in the Edo period. It will focus on the role of the book collector in the development of the Japanese book market, and on the ways in which book collecting was used to create a sense of community and identity among collectors. The lecture will also discuss the ways in which book collecting was used to promote the study of Japanese history and culture, and to create a sense of continuity between the past and the present.

2023 event schedule

Date	Time	Topic	Speaker
Tuesday, June 20th	18:00h	“Everyday Uncertainties”	Antonio Manieri
Tuesday, June 27th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 4th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 11th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 18th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 25th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 1st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 8th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 15th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 22nd	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 29th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 5th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 12th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 19th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 26th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 3rd	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 10th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 17th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 24th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 31st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 7th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 14th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 21st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 28th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, December 5th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, December 12th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, December 19th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, December 26th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri

2023 event schedule

Date	Time	Topic	Speaker
Tuesday, June 20th	18:00h	“Everyday Uncertainties”	Antonio Manieri
Tuesday, June 27th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 4th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 11th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 18th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, July 25th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 1st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 8th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 15th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 22nd	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, August 29th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 5th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 12th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 19th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, September 26th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 3rd	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 10th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 17th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 24th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, October 31st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 7th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 14th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 21st	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, November 28th	18:00h	“The History of Japanese Book Collecting”	Antonio Manieri
Tuesday, December 5th	18		

[illegible]

第2回 古語学・京都大学人文科学研究所
「近代を考える」
主役：古語学・日本研究センター、京都大学人文科学研究所
期日 2023年6月30日 13:30~17:00
場所 京都大学人文科学研究所 分館 大講義室

13:00~13:20	受付
13:20~13:25	開会式 司会 林立憲（古語学・日本古典文学部教授、日本研究センター 主任）
13:25~13:30	記念講演 第1 田中 孝（古語学・文学研究センター教授、日本研究センター 執行委員）「近代における国語化と『国語』」
13:30~14:00	第2 荒瀬 智（京都府立日本国文学研究センター、日本研究センター 執行委員）「近代文学の日本国文学研究センター」
14:00~14:30	第3 田中 孝（古語学・文学研究センター教授、日本研究センター 執行委員）「近代文学の国語化と『国語』」
14:30~15:10	ディスカッション Time
第4 荒瀬 智（京都大学文学部文学研究科教授）「戦後の『国語』と――戦後文学の国語化について――」	
第5 田中 孝（古語学・文学研究センター教授、日本研究センター 執行委員）「戦後の『国語』と――戦後文学の国語化について――」	
15:10~15:20	第6 田中 孝（古語学・文学研究センター教授、日本研究センター 執行委員）「戦後の『国語』と――戦後文学の国語化について――」
15:20~15:30	第7 田中 孝（古語学・文学研究センター教授、日本研究センター 執行委員）「戦後の『国語』と――戦後文学の国語化について――」
15:30~15:40	ディスカッション Time
15:40~15:50	閉会式
第8 田中 孝（京都大学文学部文学研究科教授）	

[illegible]

2023

KYOTO

LECTURES

Tuesday, December 12th, 18:00h

Felice Farina
 SPEAKER
 Associate Professor of Mathematics, University of Naples Federico II

Japan and the Journey of Soy
 From Food from Somewhere to Washoku

On November 12th, 2023, the University of Naples Federico II will host a lecture by Felice Farina, Associate Professor of Mathematics, on the topic "Japan and the Journey of Soy: From Food from Somewhere to Washoku". The lecture will explore the history of soy in Japan, from its introduction to the country in the 16th century to its current status as a staple food. It will also discuss the role of soy in the development of Japanese cuisine and the concept of "Washoku", the traditional Japanese diet. The lecture is part of the "Kyoto 2023" series of events, which aims to promote cultural exchange and understanding between the University of Naples and the University of Kyoto.

Speakers: Felice Farina (University of Naples Federico II), Tetsuya Tanaka (University of Kyoto), and others.

Co-organizers: The University of Naples Federico II, the University of Kyoto, and the Japanese Embassy in Naples.

Location: The lecture will be held in the lecture hall of the University of Naples Federico II.

Registration: Registration is free of charge. To register, please contact the Japanese Embassy in Naples.

QR Code: A QR code is provided for registration.

Event Organized by: Felice Farina, Associate Professor of Mathematics, University of Naples Federico II.

Co-organizers: The University of Naples Federico II, the University of Kyoto, and the Japanese Embassy in Naples.

Location: The lecture will be held in the lecture hall of the University of Naples Federico II.

Registration: Registration is free of charge. To register, please contact the Japanese Embassy in Naples.

QR Code: A QR code is provided for registration.

[illegible]



中央アジア研究学会・中央アジア学研究所内設：内務研究部
国際学術委員会

中央アジアにおける文化遺産の保護と再生

議題： 中央アジアの文化遺産の保護・人類学博物館・モンテ・パルミエの文化遺産
——アジアの文化遺産の保護と再生——

日時	2023 年 11 月 18 日 金曜日 13:30 -		
会場	東京大学総合教育センター 大ホール		
開催形式	対面・オンライン	発表者	英語・通訳あり

プログラム

講演者	前田 孝 (東京大学文化遺産学・アジア学)	発表 英語・通訳あり	
講演1	Henri-Paul FRANCHON (フランク・ポール) <i>One Century of Archaeological Excavations in Persia</i>		
講演2	Catherine DEBASSE-FRANÇOIS (カトリン・デバッセ・フランソワ) <i>The Central Asian Institute of Archaeology and Science of Antiquity, CASIRAS: History, Mission, Main Objectives and Current Research</i>		
講演3	Shiho BABA (シホ・ババ) <i>Geographical Movements from South and Central Asia: New Discoveries and Research</i>		
講演4	田中 隆雄 (タナカ リュウウ) <i>Archaeological Research in the Silk Road Region</i>		

中央アジア研究学会・中央アジア学研究所内設：内務研究部が主催する国際学術委員会です。

<http://www.jachstudies.org/jachstudies>
info@jachstudies.org
info@jachstudies.org



[illegible]

	テレビジョン・アーカイブスを再想像する 科学技術とメディア論から考える未来
	2023年12月4日（月）13時～17時30分 京都大学科学技術大学院大会議室（4F）
	参加希望の方には右のQRコードまたは下記のURLで事前登録をお願い致します https://forms.gle/6tGKD6Est7Ktwu5o
	Schedule
13:00	開会挨拶 ディーン・ハンス・シェーラー・副学長兼（京大大学）
13:10	アーカイブスについて 村上 隆（NHK放送文化研究所）
	飯沼 和（国立科学博物館）
	山崎 隆（NHKアーカイブス）
	山崎 隆之（東京エー・エス・アイ）
14:00	休憩
14:10	河村雅博（東京工科大学）
	佐々木 大（大妻女子大学）
15:40	全体討論
	司会者：佐々木 大（大妻女子大学）
	参加者：村上 隆（京大大学）
16:00	閉会挨拶

[illegible]

**BETWEEN JAPAN
AND CHINA**

**THE CONSTITUTION OF
HENRI CERUSCHUS'S
(1821-1896) ANCIEN
CHINESE BRONZE
COLLECTION**

Prof. **Oliver VENTURE**
ÉCOLE PRATIQUE DES HAUTES
ÉTUDES – PSL PARIS

21st DECEMBER 2023
10:00-12:00

Venue: Seminar room 1
(1F), Institute for Research
in Humanities, Kyoto
University.

Co-organized by the École
française d'Extrême-Orient et
the Institute for Research in
Humanities, Kyoto University

Contact:
Gisela/Naomi Nakamura: gisela@kyoto-u.ac.jp
Minoru Iwano: miwano@kyoto-u.ac.jp

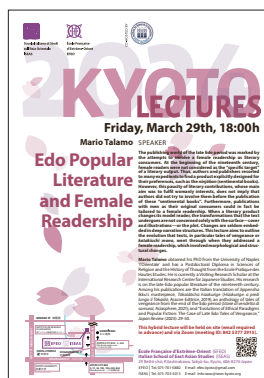

極東学研究所
立



京都大学
人文学研究所



[illegible][illegible]



彙報 〈二〇二三年四月より二〇二四年三月まで〉

おくりもの

- 。金智慧助教は、歌舞伎学会奨励賞を受賞（二〇二三年十二月二日）。
- 。酒井朋子准教授は、第二十回日本学術振興会賞を受賞（二〇二三年十二月二十日）。

人のうごき

- 。岩城卓二教授（人文学研究部）を当研究所長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二五年三月三十一日）。
- 。池田巧教授（東方学研究部）を副所長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二五年三月三十一日）。
- 。森本淳生教授（人文学研究部）を副所長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二五年三月三十一日）。
- 。池田巧教授（東方学研究部）を附属東アジア人文学情報学研究センター長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二三年九月三十日）。

- 。岩城卓二教授（人文学研究部）を附属人文学情報学創新センター長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二四年三月三十一日）。
- 。石川禎浩教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センター長に併任（二〇二三年四月一日～二〇二四年三月三十一日）。
- 。森本淳生准教授は、教授（人文学研究部）に昇任（二〇二三年四月一日付）。
- 。直野章子准教授は、教授（人文学研究部）に昇任（二〇二三年四月一日付）。
- 。村上衛准教授は、教授（東方学研究部）に昇任（二〇二三年四月一日付）。
- 。菅原百合絵は、准教授（人文学研究部）に採用（二〇二三年四月一日付）。
- 。李媛は、助教（東方学研究部）に採用（二〇二三年十月一日付）。
- 。富山一郎は、客員教授（文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日～二〇二五年三月三十一日）。
- 。岩尾一史は、客員准教授（文化研究創

成研究部門、二〇二三年四月一日～二〇二六年三月三十一日）。

。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授（二〇二三年四月一日～二〇二四年三月三十一日）。

。MARQUET, Christophe Michel は、特任教授（二〇二三年五月一日～二〇二四年三月三十一日）。

。都留俊太郎助教（東方学研究部）は、退職（二〇二三年十月三十一日付）。

。佐藤淳二教授（人文学研究部）は、定年により退職（二〇二四年三月三十一日付）。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、定年により退職（二〇二四年三月三十一日付）。

招へい研究員

。張 珮琪 政治大學斯拉夫「スラブ」語文學系専任〔准教授〕

類型論から見た西夏語文法の構造分析

（文化生成研究客員部門）

受入教員 池田教授
期間 二〇二三年四月一日～二〇二三年九月三十日

。陳 光興 国立陽明交通大学名誉教授
京都学派の遺産と新たな展開——予備
的研究

(文化連関研究客員部門)

受入教員 直野教授

期間 二〇二三年四月一日～二〇二三
年九月三十日

。DISTEFANO, Anthony カリフォル
ニア州立大学フラトン校公衆衛生研
究科教授

米国と日本の多様なコミュニティにお
ける健康の社会的決定要因に関する
比較研究

比較研究

(文化生成研究客員部門)

受入教員 立木教授

期間 二〇二三年十月一日～二〇二三
年十二月三十一日

。MORETTI, Constantino フランス極
東学院准教授

救世にかかわる敦煌出土仏教写本の研
究

(文化連関研究客員部門)

受入教員 稲葉教授

期間 二〇二三年十月一日～二〇二三
年十二月三十一日

。BICKERS, Robert ブリストル大学
教授

サバルタン移民と中国の条約港

(文化連関研究客員部門)

受入教員 村上教授

期間 二〇二四年一月一日～二〇二四
年三月三十一日

。BERNARD, Claude ニューヨーク大
学教授

十九世紀末フランスにおける書簡体形
式の虚構作品

(文化生成研究客員部門)

受入教員 森本教授

期間 二〇二四年一月五日～二〇二四
年四月四日

招へい外国人学者

。HUBBARD, James Bert スミス大学
教授

中国・日本仏教文献／仏教と脳科学に
関する研究

受入教員 Wittern 教授

期間 二〇二一年十月一日～二〇二三
年九月三十日

。張 利軍 東北師範大学歴史文化学院

副教授

夏商周国家構造の考古学研究

受入教員 向井准教授

期間 二〇二二年六月十三日～二〇二
三年四月二十六日

。高 婧聰 東北師範大学歴史文化学院
副教授

西周時代の国家構造とその歴史的影響

受入教員 向井准教授

期間 二〇二二年六月十三日～二〇二
三年四月二十六日

。李 皓 東北師範大学歴史文化学院副
教授

辛亥革命期の中国東北辺境政局に対す
る日本の対応

受入教員 石川教授

期間 二〇二二年十月二十四日～二〇二
三年十月十四日

。楊 奎松 華東師範大学中国当代史研
究センター主任

一九四九年以前の毛沢東の前半生とそ
の思想についての考証

受入教員 石川教授

期間 二〇二三年一月一日～二〇二三
年十二月三十一日

。KATA, Prachaip カセサート大学講師

The living with deteriorated soil:
The transformative ethics in troubled naturecultural worlds

受入教員 酒井准教授
期間 二〇二三年四月五日～二〇二三年四月二七日

。劉 家幸 国立成功大学助理教授
南源性派と『鑑古録』…仏教関連文体の類型に注目して

受入教員 永田准教授
期間 二〇二三年六月十五日～二〇二三年八月十四日

。高 震寰 中央研究院歴史語言研究所
助研究員
日本での秦漢史研究の現状に関する考察及び研究経験の交換

受入教員 宮宅教授
期間 二〇二三年十月三十一日～二〇二三年十一月十三日

。孫 聞博 中国人民大学教授
秦の統一における軍事史の研究
受入教員 宮宅教授
期間 二〇二三年十一月二六日～二〇

二三年十二月十三日

。廖 欽彬 中山大学教授
中日の近代哲学・思想の交差に関する研究

受入教員 福家准教授
期間 二〇二四年一月一日～二〇二四年十二月三十一日

。金 成奎 全北大学校教授
皇帝の死と儀礼——北宋七帝の喪葬儀礼・即位儀礼・弔問外交

受入教員 古松教授
期間 二〇二四年一月二九日～二〇二四年二月十九日

。王 家勳 山東交通学院准教授
日本の社会文化

受入教員 菊地助教
期間 二〇二四年二月二日～二〇二五年一月三十一日

外国人共同研究者

。趙 一水 高麗大学民族文化研究院訪問学者
近世朝鮮及び清朝の政治的言説における日本

受入教員 矢木教授

期間 二〇二二年四月六日～二〇二三年四月五日

。胡 頤 台湾大学中国文学研究所博士
候選人

南北朝時代における国家意識の構築とその表象——外交使節・活動を中心に

受入教員 永田准教授
期間 二〇二二年四月二二日～二〇二三年四月二二日

。楊 翊 ハーバード大学博士後期課程
叙述史学から分析史学へ…唐宋時代の史学の転換

受入教員 古松教授
期間 二〇二二年八月二一日～二〇二三年八月二十日

。BROWNING, Jason インディアナ大学ブルミントン校博士課程

Early Medieval Central Asian Buddhist Philosophy as Reflected in Early Japanese and Islamic Scholastic Traditions: Examining the Transmission of the Doctrine of Momentariness

受入教員 中西准教授

期間 二〇二二年八月二二日～二〇二四年八月二二日

。劉素桂 蘭州大学外国語学院副教授
近代日本人による中国文化財調査

受入教員 向井准教授
期間 二〇二二年十二月二日～二〇二三年十一月三十日

。郭珮君
日本中世の仏教願文における神国と仏国

受入教員 倉本准教授
期間 二〇二三年二月一日～二〇二三年七月三十一日

。陳詩蘭 江蘇省社会科学学院歴史研究所助理研究員
東北アジアにおけるサンタン交易の盛衰

受入教員 古松教授
期間 二〇二三年十月一日～二〇二四年九月三十日

。Sabine Hinrichs ウィーン大学 PhD candidate
民国期中国の歴史学界における元朝とモンゴル帝国についての論述
受入教員 古松教授

期間 二〇二三年十二月七日～二〇二四年二月十日

。VERDON, Noémie Claire ローザンヌ大学 Maître assistant
七～十一世紀の中央アジア・南アジア史研究

受入教員 稲葉教授
期間 二〇二四年二月一日～二〇二四年四月十一日

。HOMAYUN, Shamin Paul オーストラリア国立大学博士候補生
アフガニスタンと日本における文化記憶の共有…バミヤーン、シルクロード、玄奘

受入教員 稲葉教授
期間 二〇二四年二月二六日～二〇二四年四月二五日

外国人研究生

。石垣 章子
漢訳仏典として位置付けられた疑偽経典の成立と思想の系譜

受入教員 船山教授
期間 二〇一八年四月一日～二〇二五年三月三十一日

。Depairon, Philippe
Representations of Memories of Traumatic Events in Contemporary Japan

受入教員 直野教授
期間 二〇二二年四月一日～二〇二四年三月三十一日

。莊帆
京都における羅振玉の生活と思想

受入教員 石川教授
期間 二〇二二年四月一日～二〇二三年七月三十一日

。丁麗瓊
感情史の視点から見る日中戦争時期の中国共産党新聞宣伝史の研究(一九三十一～一九四五)

受入教員 石川教授
期間 二〇二二年五月一日～二〇二三年四月三十日

。Nathaniel Loydahl
唐と宋王朝の仏教受戒歴史

受入教員 船山教授
期間 二〇二二年六月一日～二〇二四年三月三十一日
。申請

清末以降の幣制改革

受入教員 村上教授

期間 二〇二二年九月一日～二〇二三年十月十五日

。黄 蓉

唐・宋・西夏時代における漢、チベット

の薬師仏像とその信仰に関する研究

受入教員 稲本教授

期間 二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三十日

。姜 伊

漢唐時期における天象図の変遷についての考古学的研究

受入教員 向井准教授

期間 二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三十日

。李 瀾

唐代の石刻造像銘と中国仏教実践

(Stone Inscriptions and Chinese Buddhist Practices in the Tang Dynasty)

受入教員 倉本准教授

期間 二〇二三年一月一日～二〇二四年三月三十一日

。陸 家振

近代長江流域日本人商会の発展と変遷

受入教員 村上教授

期間 二〇二三年九月十三日～二〇二四年九月十三日

。蔣 天穎

中国中古時期の墓における道教要素の研究

受入教員 向井准教授

期間 二〇二三年十月一日～二〇二四年三月三十一日

。皮 艾琳

漢唐の墓葬図像配置に関する研究

受入教員 向井准教授

期間 二〇二三年十月一日～二〇二四年九月三十日

。王 依依

明清回儒思想と回民社会―葬儀文化の儒化を中心に―

受入教員 中西准教授

期間 二〇二三年十月一日～二〇二四年九月三十日

。李 奥

中古華嚴經典文獻研究…敦煌を中心に
受入教員 永田准教授

期間 二〇二三年十一月一日～二〇二五年一月三十一日

東アジア人情報学研究センター講習会

。二〇二三年度漢籍担当職員講習会(初級)

第一日(九月二十五日)

開講挨拶・オリエンテーション

池田 巧

漢籍について(四部分類概説を含む)

永田 知之

カードの取り方―漢籍整理の実践

楊 維公

第二日(九月二十六日)

工具書について 高井たかね

漢籍関連サイトの利用

Witern, Christian

実習を始めるにあたって

永田 知之

漢籍目録カード作成実習

第三日(九月二十七日)

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習(一)

第四日(九月二十八日)

和刻本について

(大学院文学研究科教授)

宇佐美文理

漢籍データ入力実習 (二)

第五日 (九月二十九日)

朝鮮本について

実習解説

情報交換

終了挨拶

矢木 毅

楊 維公

安岡 孝一

池田 巧

人文情報学創新センター講習会

。二〇二三年度漢籍担当職員講習会 (中級)

第一日 (十一月六日)

開講挨拶・オリエンテーション

岩城 卓二

経部について

古勝 隆一

叢書部について

藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日 (十一月七日)

史部について

古松 崇志

漢籍データ入力実習 (一)

第三日 (十一月八日)

子部について

稲本 泰生

漢籍データ入力実習 (二)

第四日 (十一月九日)

集部について

(大学院人間・環境学研究科教授)

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習 (三)

第五日 (十一月十日)

漢籍と情報処理 Wittern, Christian

実習解説

楊 維公

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

岩城 卓二

ある研究班員の執念

石川 禎 浩

二〇一九年四月から五年にわたって実施してきた共同研究班「二〇世紀中国史の資料的復元」がこの三月に終了した。隔週金曜午後に定期開催した例会は五年で八十回あまり、新型コロナウイルスの感染爆発の期間も含まれているという事情を考慮すれば、かなり頑張って活動してきたと胸を張ってよいだろう。研究班の最終年度後半に並行して論文集の原稿とりまとめ、編集を行い、この所報『人文』が出る前後には、その論文集も刊行されているはずである。

その論文集に収められた十七篇の論文のひとつ、田中仁（大阪大学名誉教授）氏の「現代中国政治の転換と農村幹部——河北省X県の事例」は、河北省のある農村の共産党幹部の工作筆記（一九四八―八九年、全八四冊、手書き）の読解をもとに、一九七六―八二年時期の政治の転換が農村の現場に何をもたらしたのか、基層レベルで解明した労作であると同時に、氏が渾身の力をこめてこの世に遺した特別な作品、遺稿である。

わたしが研究所で主宰した研究班は、二〇〇六年四月に発足した「中国社会主义文化の研究」以来、「現代中国文化の深層構造」「毛沢東に関する人文学的研究」と続き、今回のもので、四つ目となるが、田中氏はその最初期からのメンバー（班員）で、わたしよりも年齢も研究キャリアも上、ある意味で控えめな兄貴分のように研究班の運営を支えてくれた。四つの研究班での田中氏の報告回数は総計で九、コメンテーター担当回数は七を数える。これは学外からの参加者の中では頭抜けて多く、班長としてどれだけ助けられたか知れない。

そんな田中氏の最後の報告は、ある意味で命を削ってなされたものだった。二〇二〇年春に阪大を定年退職したのち、田中氏は喉の疾患で気管を切開手術、以後自宅で器具を付けての療養生活を余儀なくされた。もっともコロナ禍のせいで、研究班はオンライン併用開催になっていたこともあり、田中さんは最後まで参加と論文執筆に意欲を見せ、寄稿前の二〇二三年二月に班例会での報告を申し出られた。ただし、オンラインでのリアルタイム報告は難しいということで、事前に自身で収録した動画一時間分をZOOMで放映された。事情を考慮すれば、報告後の討議は省略することもできたが、田中さんは研究班のやり方だからと、あ

えてリアルタイムの討議に臨まれた。声のかすれはあるものの、応答は理路も整然、論旨は明快、約四〇分の討議も無事にこなされた。大病後とは言っていたが、田中さんなかなか元氣じゃないか、そう思っていたところ、一カ月後に論文が送られてきた。添えられていた手紙には、ちょっと気になる言葉が綴られていた。

病氣の話ではなく、論文の中身の話である。田中さんの研究は、人民共和国の農村で活動した基層の党幹部の工作ノートという極めて生々しい資料を利用したものであったが、その資料の所有者である党幹部の遺族が最終段階になって、発表を見合わせて欲しいという申し出をしてきたというのである。昨今の中国の事情を考えれば、現場での党活動の実態を伝えるこの手の文書が国外で利用され、學術論文に大きく引用されることに對し、遺族側が懸念を持つのももつともなことである。

けれども、逡巡ののち、田中さんは論文の発表にこだわった。病後の不調から果たして今後研究を続けていくことができるのか自体を自問している、事情を汲んで収録してもらえまいかと言って原稿を再送してこられた。だが、いくら田中さんの頼みとはいえ、こればかりは首を縦に振るわけにはいかない。それが道義的に問題のある行為であることを指摘した上で、断腸

の思いでこう回答した。「田中さんがあくまで投稿したいということであれば、資料提供者の同意を取って頂きたい思います。かりにその合意がないのであれば、このテーマでの投稿は——非常に残念ですが——今回は見送りとせざるを得ません」。

一カ月半ほど音信が途絶えたあとの四月初め、中国語のメールを転送しただけの田中さんのメールが届いた。本文は一字も書かれていなかった。転送された中国語のメールは、くだんの資料提供者から田中さんに宛てられたもので、その真摯な姿勢に打たれ、人名や地名を記号表記にすることを条件に、資料の利用と論文の公表を認めるものだった。「田中さん、やったなあ」と思わずうなづいたわたしは、田中さんからの修訂稿（完成稿）の到着を待った。だが、その二カ月後の六月に届いたのは、田中さんの計報だった。それも四月一四日に亡くなったという……。つまり、資料使用の許可取得を知らせるメールを何とかわたしに転送して間もなく、田中さんはこの世を去ったのだった。その後、資料提供者と田中さんとの仲介役だった南開大学の先生から田中さんの原稿が届いた。人名、地名などはすべてローマ字で代替してあり、すぐに修訂稿であることがわかった。

田中さんの最期の日々がどのようなものだったかは

わからない。おのが精魂を傾けて仕上げた研究の成果をこの世に残すため、病軀にむち打って資料提供者に使用許諾を嘆願する。それからは、自身に残された時間を数えつつ返事を待つ日々だった、そんなことが想像されるのみである。最期の瞬間まで研究一途だった田中さんの遺稿を収録して研究班の報告論文集が出せる。わたしはそれを誇りに思っている。

盗賊の供述調書からリサイクル 社会を考える

——共同研究が育んでくれる史料を読む
力——

岩 城 卓 二

二〇二〇年度から「環境問題の社会史的研究」、それを引き継ぎ二〇二三年度からは「生きる営みと環境問題」と題する共同研究に取り組んでいる。班員は私が専門とする日本近世史研究者は少なく、日本史だと明治以降から高度経済成長期を対象とする近代史研究者、そして文化人類学、社会学、哲学等々他分野の研

究者たちであり、毎回の報告と、長時間の討論からはたくさんさんの学問的刺激をもらっているが、とくに「精緻」に近世史料を読むに必要な「気付く」力の向上につながっていると自己評価している。

○

日本近世の人口の七、八割は百姓であり、六万をこえる村が、彼らの生活の場であった。農業、山林業、漁業、商業等々、百姓の生きる営みはさまざまであったが、一八世紀後半頃までは村で仕事に励めば、苦しいながらも家族を持ち、生きていくことができた。江戸時代が「平和」であったといわれるゆえである。ところが、一九世紀になると、村に居ても生き抜くことが難しくなり、村を飛び出すものが増えていった。それは専ら男たちであり、正規の手続きを踏まないで村を後にした彼らは「無宿」と呼ばれることになる。村にとっては人口減少や耕作放棄地の増加につながるし、新しい安住の地を見付けられなかった無宿の中には盗賊になって犯罪行為に手を染めるものもいた。無宿の増加は「平和」な江戸時代の崩壊を予感させるものであり、近世史研究でも、無宿を生み出す社会構造への関心は高く、私もその一人である。ところが無宿の人生を辿ることは容易ではない。近世史料に「無宿」はたくさん出てくるのだが、無宿になった経緯や、

犯罪に手を染めるまでの日々を個人名で語ってくれる史料は限られている。

私は、もう二〇年以上、鉾山開発や日本海海運で栄えた石見国内の史料を調査している。その一つで、石見と私を繋いでくれた恩人とも言えるのが熊谷家の文書である。同家文書を写真撮影し、研究室に持ち帰っては翻刻を続けることで、私の近世史像は随分豊かになったと思っているのだが、最近、そのなかに無宿の人生が知られる文書があることに気がついた。「申口」「口書」などの表題が付された盗賊たちの供述調書である。

幼少の折に、親に連れられ居所を飛び出したものの両親に先立たれ、「乞食」として各地を放浪し、成人後は日雇仕事をしながら生き長らえていたが、困窮に堪えかね、掏摸や軽微な盗みを繰り返し、最後は土蔵を破った無宿の増蔵。受け継ぐべき家産もなく、安住の地を求めて村を飛び出したものの定職には就けず、同じ境遇の無宿たちとつるんで盗みを働いた鉄五郎。供述調書は、「平和」では語り尽くせない一九世紀日本近世の厳しい現実と、無宿の人生が知られる点で貴重な史料なのだが、二〇点ほど残されている供述調書を読んでいると、生まれた村、両親の名前、犯罪に手を染めるまでの仕事、犯した罪等々、罪状確定に必要な

な事項だけに止まらない情報を拾い出せることに気がついた。

盗品の多くが衣類や道具類であったことは、近世史研究者であればすぐに気がつくのだが、供述調書によると、それら盗品は所々を転々とする途中で一宿を提供してくれた百姓への御礼、道すがら知り合った百姓や行商人への売り渡し、あるいは物々交換などで、盗賊の手を離れ、人びとの間で再利用されていたことが知られる。そして盗品とは知らなかった百姓や行商人が、それを転売し、盗賊が捕縛されたときにはもはや誰の手に渡ったのか不明なことも少なくない。百姓たちをはじめ庶民の日々の営みの中では、古着・古道具を御礼の品や代金として受け取ること、あるいは物々交換の対象とする世界が分厚く存在していたのである。日本近世には、町方を中心に古着・古道具売買を業とするものがあり、その多さが、近世がリサイクル社会といわれる理由にもなっている。そして幕藩領主は、近世初頭から古着・古道具屋に株仲間を結成させ、盗品の換金を厳重に取り締まった。近世のリサイクルは、もちろんこうした幕藩領主の目が届く株仲間化された正規の古着屋・古道具屋が介在する世界でも広がっていたのであろうが、盗賊たちは、官憲の手が及びにくいもうひとつのリサイクル世界が社会に分厚く広が

それが百姓をはじめ多くの人々の日常生活を支えていることを熟知していたのだと思われる。それは盗賊が、かつて百姓であったときも、無宿になってからも、そういう世界の住人だったからであろう。

日本の近世史料は一人の研究者が一生かかっても読み切れないほど残されているが、それらが雄弁に語ってくれるのはもっぱら官憲や町村の役人が掌握する世界、リサイクルでいえば、株仲間化された古着屋・古道具屋が介在する世界であるが、それは人びとの「生きる営み」の一面に過ぎず、一見、何の関係性もなさそうな盗賊の供述調書という史料は、それとは位相の異なる人びとの「生きる営み」に密着した古着・古道具のリサイクル世界が一九世紀近世社会には分厚く広がっていたことを教えてくれる。

○

毎回の研究会では、現在の社会を鋭く「観察」した文化人類学、社会学をはじめ多分野の報告を拝聴することができる。「観察」は文献史料からはみえない、あるいはみえにくいところを照射することで、人びとの「生きる営み」の総体に迫ろうとしており、報告を拝聴する度に、文字史料に恵まれた日本の近世史研究は「精緻」な実証を「売り」にするものの、人びとの「生きる営み」にどれだけ肉薄できているのだろうか

と考えさせられている。

史料を「精緻」に読むとは、史料の主題ではない小さな「事実」にも「気付き」ことだと、私は思っている。多分野の研究者が集まり何時間も議論を続ける人文研の共同研究とは、近世史料を「精緻」に読むに必要な「気付き」力を育んでくれる大切な場であり、盗賊の供述調書から人びとの「生きる営み」のなかに広がるリサイクル世界の存在に気付けたのも、私にとっては研究班の立派な成果である。そして毎回、討論が白熱するのは、一見、自己の研究関心とは距離がある報告であっても、新たな「気付き」を得るための聞く耳を持ち、自己の研究手法を豊かにしたいという人たちが集まっているからなのだと思う。私の共同研究班に集う人びとから、いわゆる「タコ壺化した人文学」という印象を受けたことはない。

科学論がメディア論と出会う場所

岡澤 康浩

河村班こと「科学的知識の共同性を支えるメディア実践に関する学際的研究」（班長・河村賢さん）にはもともと、二つの目的があった。一つは、知識や科学技術について研究している社会学者・歴史学者・人類学者のひとたちが交流できる場所を京阪神に作ることであり、もう一つは科学論をメディア論へと接続することだった。

前者の目的は比較的わかりやすい。科学社会学・科学技術史・科学人類学・STSというのは、細かい違いは無数にあるものの、大まかにはみな「科学技術」や「知識」に関心をもっているのだし、京阪神にはそれぞれの分野の専門家が十分にいるのだから、なんとかなるだろうという目算もあった。実際、関係者にお声がけしてみたところ幅広い参加者に恵まれた。

一方で、もう少し難しかったのは科学論とメディア論の接続という目標であった。科学論とメディア論の接続を正当化する方法はいくつかあるが、その一つは

メディア論を「媒介」についての学問としてとらえ、科学的知識の生産を「媒介された」知識生産の営みとしてとらえるというものだろう。つまり、科学的知識とは、個人による直感的把握、直接知、信念とは区別され、何らかの意味で公共化された知識を指しているのであり、それを可能にするのは科学器具、装置、データ、概念による媒介なのだ、という立場である。こういう考えをとれば、科学論は原理的にメディア論を無視できないことになる。こうした原理的な議論を抽象的に展開することも可能だろうが、河村班で目指されたのは、そうした媒介のあり方を、具体的な実践を介して検討するという方向性であった。

こうした科学論とメディア論の接点をさぐるために、河村班では班員などの個人報告による例会のほかに、具体的な対象を扱う識者をお招きした三つの特別研究会を開催した。

六月に開催された一つ目の特別研究会では、ちょうど邦訳が出版されたばかりのリサ・カートライトの『X線と映画―医療映画の視覚文化史』を取り上げた。このイベントでは訳者であり、視覚文化論の専門家でもある望月由紀さんと長谷正人さんのお二人にお越しいただき、また書評者は医学史家の藤本大士さんと田中祐理子さんに引き受けていただけた。もともと、図

像や映像は科学論においても重要なトピックとして注目されていることもあり、この書評会は参加者からの反応もよく、またお越しいただいた訳者の先生方も、視覚文化論の本として書かれた本が医学史を専門とする方にも真剣に受け止められたことを喜んでおられたように思う。

二つ目は、七月に開催された合同書評会「実践としての科学的認識…『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」である。これは科学社会学・科学人類学の古典であるブリュノ・ラトゥールとステイヴ・ウールガールの『ラボラトリー・ライフ』邦訳刊行と、科学史における新しい古典の地位を占めるようになったロレイン・ダストンとピーター・ギャリソンの『客観性』邦訳刊行とを記念して行われた。この合同書評会において登壇者・司会などを務めて頂いたのは、人類学者の鈴木舞さん、森下翔さん、社会学者の前田泰樹さん、河村賢さん、金信行さん、立石裕二さん、歴史学者の金凡性さん、瀬戸口明久さん、岡澤となり、知識や科学を対象とする社会学者、人類学者、歴史学者が集まる場所を作るという目的を果たすことができた。

また、『ラボラトリー・ライフ』も『客観性』も、図像、グラフ、写真といった科学論における「表象」研究の重要性を示すものであり、科学論と視覚文化論

の相性の良さが再確認された。同時に、両著作においては「表象」を分析することは、完成された図像の分析にとどまらず、図像の生産や利用、それを介した知覚の再形成といった「実践」の問題として取り上げられていた。両著作が注目したような、図像の作成や利用を契機として展開される科学者同士や科学者と装置との「インタラクション」は、媒介の学としてのメディア論をより具体的な形で科学論と結びつける戦略的に重要なトピックになりうる。班長の河村さんのご専門の一つはエスノメソドロジーと呼ばれる社会学の分野であるが、これは人類学と並んでインタラクションについて深い分析を進めてきたことで知られているため、インタラクションを介した科学論とメディア論の接続という方向性は、河村班にとっては特に興味深いものであった。

こうした二つの研究会を踏まえて十一月に開催された最後の特別研究会では、音楽社会学者・人類学者であり、河村さんと同じくエスノメソドロジーに示唆を受けて仕事を進められている吉川侑輝さんにご発表を頂き、音楽学者の岡田暁生さんにゲスト・コメンテーターを務めていただいた。この研究会では音楽家同士の会話という専門家同士のインタラクションを取り上げ、そうしたやりとりにおける知識・理解が分析され

た。そこでインタラクシヨンの分析とは、ある特定の文の発話はもちろん、そうした文に還元されない沈黙なども含まれていた。また発表後のディスカッションでは、視覚や聴覚といった単一の感覚には還元されない複数の感覚や、手の動きやモノとしての楽器などが協働させながら演奏される楽曲を分析する可能性などが検討された。

以上見てきたように、河村班の活動を通して、当初掲げたような京阪神を拠点に知識や科学技術について研究している社会学・歴史学・人類学のひとたちと交流できる場所を人文研を拠点に作り出すことには成功した。参加者に科学史家突出して多いという偏りはあったので、社会学者・人類学者・哲学者・科学史家以外の歴史家などを増やすのが今後の課題だろう。

科学論とメディア論についても、図像や映像を入り口とすることで、メディア論との連携を深められた。

また、視覚文化論との接続ほどは明確に掘り下げることはできなかったが、モノ・人・環境の間に発生するインタラクシヨンをメディア論と科学論の接点として析出することもできた。メディア論系の参加者からは、視覚装置を中心とした科学器具の使用に関心が寄せられていたので、こうしたモノを利用したインタラクシヨンに注目する形で、科学論とメディア論の接続をさ

らに深めることができるだろう。瀬戸口さんが新たに組織される「モノ・知識・環境」班は、河村班のメンバーと問題意識をある程度引き継ぎながら、それをさらに拡張する方向性に進んでいく予定なので、こうした課題が達成されることを期待したい。また、「歴史的メディア認識論・テレビ史におけるメディア論とテクノサイエンスの交錯」を掲げる新しい班がショーン・ハンスンさんを班長として開始され、ここでも視覚文化論を出発点としながらも、メディア論、知覚の歴史、科学技術史の接点を検討することになっている。私の任期はそう遠くない未来に切れるので、人文研の未来を見守ることはできないが、河村班の活動と呼び水として、科学論とメディア論の接続を目指す世界的にも珍しい場所を人文研が提供し続けることを願ってやまない。

（付記：本原稿は『人文』七〇号（二〇二三）のために執筆されたが、諸事情により掲載できなかったため、本号に掲載されている。そのため、文中で描かれている河村班の活動は、すべて二〇二二年度のものであることに注意されたい。）

疫病という「うづしほ」の只中で

香 西 豊 子

共同研究「ポスト・パンデミック世界の新しい社会・環境理論に向けて」（通称「パンデミック班」）が終わりをむかえる。二〇二〇年秋始動の、日本學術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム）」の採択課題「パンデミックの歴史研究に基づいたポスト・パンデミックの社会・環境理論の構築」（代表・藤原辰史）に併走するかつこうで、二〇二二年四月にスタートしてから三年。課題として遠くに「ポスト・パンデミック」の世界を見据えていたはずが、いつしか懸命に目の前の、自身の吞まれた「パンデミック」を対象化する方策を探るようになっていた。班員それぞれが研究者として／生活者として「パンデミック」に向きあった軌跡は、論集『疫病と人文学』（岩波書店）にまとめられ、来春に刊行される予定である。

それにしても、COVID-19の流行が生活にあたえた影響は、想定外に大きかった。日々の暮らしはもちろ

ん、研究生活もさまざまに制約をうけた。個人的なことを書けば、何年も順番を待ったのち、ようやく二〇一九年秋に次年度一年間の取得がきまった筆者の教職員研修は、ステイ・ホームへと化した。公衆衛生の観点からすれば、どうやら人文社会学系の研究活動は、「不要不急」のカテゴリに入ってしまうらしい。とはいえ、ふだんから疫病や公衆衛生の歴史を考えていた研究者が、はい、そうですねと、吞まれるままになっているわけにはいかない。旧知の藤原辰史さんから学振の研究課題のメンバーにとお誘いいただいたときには、ぜひともと前のめりをお願いした。

それから三年半ほどの研究会で、途中何度も、大学のゼミにでた話題を思い出した。エドガー・アラン・ポーの短編小説『A Descent into the Maelström』（邦題は、森鷗外訳「うづしほ」のほか、新潮文庫版「大渦巻への落下」など種々）に関する話である。指導教官の内田隆三先生が、人文社会学系の研究者の仕事で、巨大渦巻に船ごと吞み込まれながらも状況の観察をつづけ、最終的に窮地を脱した語り手の漁師の態度にたとえたのだった。そのときは、人文社会学の対象のイメージが、漏斗のごとくに切りたち高速で旋回する大渦巻とは重ならず、違和感だけをのこして忘れてしまっていた。だが、月に一度、研究班のメンバー

が交代で、変幻自在にすがた（言葉？ 社会？）を変えこちらを呑みにかかってくる大渦巻のごとき疫病を前に、研究報告をするのを聞くうちに、かつてのゼミの光景が蘇ったのだった。

小説のあら筋は、こうである。ノルウェーのとある群島のあいまに位置する海域は、山をも底から震わすほどの大渦巻が発生することで知られていた。漁民らは、それに呑まれることを恐れ、わざわざ遠くの漁場へとむかう。手つかずの漁場を絶好の生業の場としていたのは、当の漁師ら三兄弟ばかりであった。そうしたある日、定刻どおりに漁をおえ、さて岸に戻ろうかという頃になって急に暴風が吹きあれ、帆柱をとられた兄弟らの船はその海域にとり残されてしまう。手元の時計は、それでもまだ大渦巻の発生までに猶予があると告げていた。だが、じつのところ時計は水をかぶって止まっており、気づけば船はゆっくりと旋回をはじめていたのだった。

途中、弟は暴風にあおられ吹きとんだ。兄は正気をうしない、船もろとも大渦巻の底へ消えた。ただひとり語り手の漁師のみが生還した。それは、漁師が好奇心から大渦巻のなかの浮遊物を観察し、円筒形の物体が沈まずに渦の縁を回りつづけることを看破した結果だった。漁師は、樽につかまり大渦巻へとみずから飛

び込んだ。一夜明けてべつの船に救助されたとき、漁師の髪はすべてが真っ白になっていた。

この「うづしほ」の物語ではないが、危険だと分かっていることも、暮らしのなかでやり過ごしてしまっていることは多々ある。いわば疫病も、その一つであろう。みなが生身の体を生きていながら、なぜか疫病は、べつの世界の話と捉えてしまっていた。そうした現代の脆さもふくめ、共同研究では班員が各様に観察し解釈したことを言葉にして報告しあった。なかには人知れず、白髪になる思いをしていたメンバーもいたかもしれない。人文学の知の正念場であるかのような雰囲気は、つねに班内に漂っていた。

とはいえ、研究会自体はけっして堅苦しいものではなく、それこそ大学院のゼミのようであった。ほどよい緊張感をたもちつつも、自由に発言が行き交った。研究者の習性を逆手にとり、開催はいつも、班員の予定の埋まりにくい月曜日の朝一だった。対面開催ができたときは、閉会後に近くへランチに繰りだした。パндеミック現象の渦中にあっても、共同研究の醍醐味を手放さなかった。学外研究者の筆者には、それがとても新鮮だった。

虎溪山漢簡「食方」読書会

高井 たかね

一九九九年五月に湖南省沅陵県で発見された虎溪山一号漢墓は、前漢文帝の後元二年（前一六二）に死去した初代沅陵侯呉陽が埋葬された墓であり、副葬品として千数百点の竹簡が出土した。三種に整理されたそのうちの一つが料理法を記した「食方」である。「中国生活文化の思想史」班では名和敏光班長（山梨県立大学）のもと、おおむね月一回の研究発表会の翌日にこの出土文献の読書会をおこない、詳細な検討をすすめている。

虎溪山一号漢墓については二〇二〇年に報告書が出版され（『沅陵虎溪山一号漢墓』文物出版社）、「食方」全簡の写真と釈文が公表されて研究の準備が整うや、武漢大学簡帛研究中心のウェブサイトに「簡帛網」などでは文字の釈読、簡の綴合、編序、そして内容に踏み込んだ論考が次々と発表され始めたほか、本班班員である村上陽子さん（防災専門図書館）は報告書刊行に先んじて公開された計五簡の釈文を日本語訳とともに

紹介しているし（『出土資料からみた漢代の食生活』『中国出土資料研究』第九号、二〇〇五年三月）、同じく班員の森和さん（杏林大学）もこの研究班発足に先行して「食方」研究に取り組み、内容構成、扱われる食材と調理法などについて考察をおこなってきた。そうはいっても報告書が刊行されてまだ数年、この史料の研究はまだ初期段階にあり、文字釈読などにおいても検討の途上といったところだろう。

二〇二三年四月に始まった私たちの読書会では、まずは森さんが登壇し、この史料の概要と独自に手がけた整理・検討の結果を報告したうえで、穀物の調理法「飯方」（めしの作り方）と「鬻方」（かゆの作り方）から精読を始めた（この回の報告内容を含む論文がすでに公開されている。森和「漢人の食―虎溪山漢簡「食方」初探―」『日本秦漢史研究』第二四号、二〇二三年一月）。その後の一年間に、「飯方」に関連する穀物を蒸す工程、肉を入れた粥の調理、大きな肉の切り身の作り方、肉を直火で炙る工程などを記した簡を読み進めている。

漢代の飲食というと、字書などの古典文献に残された飲食関連の記事、あるいは画像石・磚の庖厨や宴飲図といった資料があるが、大量の食材や料理、そしてその名称と数量を記した竹簡や木札が出土した、虎

溪山と同じ湖南省の馬王堆漢墓のものが代表的な資料群である。ここで出土した文字資料は、それに対応する実物資料が存在するという点できわめて貴重なことは言うまでもないが、わたしたちの読書会で扱う「食方」は、食材、その量、調理の段取りというレシピの書かれたものであるから、この時代の飲食研究に欠けていた性質の資料といえる。

中国語の料理名は今も昔も調理法と使用する食材名を組み合わせたものが多いから、名称からどのような料理かを類推できるものが比較的多く、具体的なレシピが分からない料理名リストのような資料からでも引き出せる情報がある。たとえば馬王堆漢墓の竹簡に見える「牛白羹（牛と稲米のあつもの。「白」は稲米）」「豕炙（炙った豚肉）」「濯鷄（湯がいた鶏肉）」「魚膾（魚のなます）」など、名前を見るだけで出来上がった料理がなんとなく想像できるものも少なくない。しかし名前に現れない情報、たとえば食材の大きさや、調味料は何をどれだけ使うのかといったことは分からないし、そもそも作業の工程が違えば出来上がりも変わってくるだろう。

「食方」に残されたレシピはどのようなものか。たとえば先に挙げた馬王堆漢墓竹簡の「豕炙」に関連したものをみると、料理名は異なるが第一六簡には次の

ようにある。

冊六 為豚臠方。先刺殺、乃燒胄毛、以手逆、搯之掾（縁）、炙以醬汁、□□□□

（冊六 豚肉の大きな切り身の作り方。先ず（豚を）刺し殺し、それから毛をきれいに焼き、手で毛を逆立てて、（まだ焼き尽くせていない）根元部位の毛を抜き、醬の汁を用いて炙り、……）

同じ炙った豚肉だが、これには肉の下処理の手順から調味料も書いてある。

また、中国の料理書では六世紀前半に成立した北魏賈思勰『齊民要術』の関連諸篇が有名で、伝世文献では最古といわれているのだが、虎溪山漢簡「食方」が発見される前から『要術』以前に編纂された料理書がいくつもあることは知られており、『要術』自体も『食経』『食次』といった料理書を多数引用している。

『要術』に先行する中国初期の料理書はすでに失われ、諸書に引用される佚文でしか内容や体裁を伺うことができない。当然ながら「食方」は、こうした料理書研究にも新たな糸口を提供するだろう。

先に紹介した簡もそうだが、「食方」は出土した三百片がすべて残簡で、全書の三分の一ほどしか残存し

ていないという。残念ながらこの書も内容の全貌を知ることができないが、これまで最古といわれてきた『齊民要術』を約七百年も遡るものであり、また「食方」前後の時代を含めた飲食史の知見を大いに補完するものと期待される。

そもそも料理のような日常的な人の営みは文字資料に残りにくく、馬王堆漢墓のような偶然は稀にあるものの、有機物である食材・料理といった実物資料が時間を経ると基本的には朽ち果てるといふ性質とあわせ、その歴史研究にとっては大きな妨げとなっている。その反面、二千年以上前の中国の厨房と完全に条件をそろえるのは難しいにしても、思い立ったら身の回りの食材や器具での再現実験を比較的試みやすいということとは、この領域を研究するうえでの恵まれた点といえるかもしれない。班員の村上さんはこれまでも自身の研究において、コムギ・モチアワ・モチキビを蒸して食す実験をおこない、「食方」（論文中では「美食方」）の穀物調理の記事を検討しているし（「コムギの伝来と普及」「春耕のとき」汲古書院、二〇一五）、同じく伊藤裕水さん（山口大学）は訳注作成にあたり、数パターンの条件下でアワを蒸しあげたうえで「食方」の調理工程を検証し、引き続き条件を変えて実験を継続中である。

二年目以降も班長を始めとする出土文献資料の専門家、飲食史研究者、そしてわたしのような門外漢をも含む多彩なメンバーが集い、検証実験や世界の民俗例の参照といったさまざまな手法も駆使して、いまやこちらの中国現存最古というべき料理書を解読し、漢代の料理の実像と中国における料理書の初期的形態に迫ってゆく。

「社交」の美神

ミューズ

高 階 絵里加

共同研究班「芸術と社会―近代における創造活動の諸相―」は、二〇二〇年度より二〇二三年度まで開催された。開始予定であった二〇二〇年春にコロナ禍より対面開催が不可能となり延期を余儀なくされ、同年九月に第1回研究会をオンラインで開催したため、実質としては約3年半行われたことになる。しばらくはオンライン開催が続いたのち、二〇二二年六月からは対面とオンラインの併用での開催が可能となり、以後

はほぼこの形式で行った。この間、三一回の研究会を開き、延べ三四名の方に報告していただいた。

この研究班は、「美術・文学・音楽・建築・歴史・映画・メディア」といった芸術に関連する諸分野の研究者がつどい、広い意味での近代における芸術作品や芸術家と社会との多様なむすびつきの一端を明らかにすることをめざす。具体的には作品や資料、あるいは作家や出来事を題材として社会のなかでの芸術の諸相を考える」というやや漠然とした趣旨のもとではじめたが、班員のみなさんがそれぞれの専門的な研究から一歩踏み出して「芸術と社会」について考えくんだり、とくに各研究会後半の全体討論を通してさまざまな新しい問題の発見につながったことはありがたかった。

さて、話は変わるが、フィレンツェ南部、ヴェッキオ橋を南側へ渡りアルノ河畔を東に少し行くと、デミドフ広場があらわれる。広場に建つ記念碑は、一九世紀前半にニコライ・デミドフ（一七七三—一八二八）のために建立された。デミドフ家は製鉄業や銀・マラカイトなどの採掘事業により数代にわたり莫大な富を築いたロシアの実業家である。芸術の保護者でもあったニコライはパリに赴き、その後イタリアに居を移したトスカナ地方において数多くの学校や病院の設立を経済的に支援し、晩年はフィレンツェ郊外に土地を買ひ

広大な邸を建てて蒐集した芸術品を飾る計画を立てた。その息子としてサンクト・ペテルブルグに生まれたアナトリイ・デミドフ（一八一二—七〇）は、おもにパリで教育を受け、ナポレオンの姪マチルド・ボナパルトと結婚し公爵の爵位を得た。ロシア語以外のほとんどのヨーロッパ言語を流暢にあやつるといわれたアナトリイは生涯の大部分を西洋貴族社会において過ごし、ヨーロッパ中を旅して見聞を広めつつ父や祖父同様に熱心に芸術を蒐集した。その芸術への趣味を培ったのは、彼が若き日を過ごしたパリであるといわれる。アナトリイにより購入された絵画のなかには一八三四年にパリのサロンに出品されたポール・ドラロツシュの《ジェイン・グレイの処刑》やフランソワ・マリウス・グラネの《プッサンの最後》があり、またドラクロワに注文した《ラビダ修道院のコロンブスと息子》、《コロンブスの帰還》等の歴史画がある。

父の没後の一八三〇年、アナトリイは当時フィレンツェで活躍していた彫刻家ロレンツォ・バルトリニに、兄パーヴェルとともに父の記念碑を注文した。一七七七年にプラート近郊のサヴィニャーノに生まれたバルトリニは、パリでの修行ののち（パリ時代にはアングルと深い友情を結び、アングルによる青年時代の肖像画が残されている）イタリアに戻りカラーラ

美術アカデミーの教授となり、一八一四年からはフィレンツェにアトリエを構えこの町を訪れる各国の人々の注文を受けて国際的に活躍した。とくに肖像彫刻においては写実性と繊細な心理描写にすぐれた清冽な印象の大理石作品が人気を呼び、バイロン、リスト、ロッシーニ、スタール夫人ら著名な芸術家の像を残している。

大理石により造られたニコライの記念碑は、台座の最上部に古代風の衣をまとったニコライが座り、傍らに立つ息子をやさしく見つめその肩に手を置いている。反対側には「感謝」を象徴する少女が座り、ニコライを見上げている。彼らの足元の台座周囲の四人の女性像は、デミドフ家の博愛精神を示す「慈愛」、シベリア地方の鉱山による富を表す「シベリアとブルート神」、芸術への保護を象徴する「自らを芸術にあらわす真実」、そして「饗宴のミューズ」である。頭部に花飾りをつけ堅琴と水差しを持つこの「饗宴のミューズ」の名はバルトリニから注文主への書簡中にみえるものであり、いっぽうアナトリイはこれを「*muse de la Société*」であると言及していた。他の三体が父ニコラスの富と人徳に関連する像であるのに対し、「饗宴のミューズ」は注文主の開いた多くの祝宴を体現すると考えられ、アナトリイ自身の社交性と親

愛に満ちたもてなしの数々を思い起こさせる。その芸術蒐集も、饗宴の場を通じたさまざまな人々との交流のなかから形成されたものであったことは想像に難くない。「*Société*」はこの場合、「社交」「社交界」に近い意味であろうが、いっぽう「社会」を意味する言葉でもある。とくに関連性も根拠もないが、私は「*muse de la Société*」を人々がつどう場をつかさどるミューズであると思いたい。そしてこの四年間、彼女が研究会を見守ってくれていたと考えたい。

本年三月には研究班を無事に締めくくることができた。現在は報告内容を中心とした成果論集の刊行準備中である。それぞれの本務が忙しいなか、研究会に参加し発表してくださったみなさんには心より感謝している。あらためて御礼を申し述べたい。

大洪水の前に

菅 原 百合絵

フランスには、「わが亡き後に大洪水よ来たれ (Après moi, le déluge)」という有名な警句がある。一説によるとこの警句は、七年戦争のさなか、ある戦いでプロイセン王フリードリヒ二世に歴史的な大敗を喫したルイ十五世に愛妾ボンパドール夫人がかけた言葉に由来するという。過ぎた失敗を悔やむなかれ、今だけが大事なのだ、という憔悴した王への慰めがこめられているにしても、あまりに身も蓋もない言い様で思わず苦笑してしまう。だが、この表現は図らずも「啓蒙の時代」の両義的な精神性を反映しているとも言えるだろう。

十八世紀啓蒙とは、無知蒙昧を打破し、普遍的な人間理性を信じて進歩へひたむきに邁進する運動である、と一般的には理解されている。そしてその把握は間違いない。カントはいみじくも啓蒙を「未成年の状態からの脱却」と表現し、「敢えて知れ (Sapere aude)」をその標語として掲げた。こうした啓蒙観

を後押しする時代の記念碑として、当時のあらゆる分野の知識の結晶としての『百科全書』を挙げることもできるだろう。あるいは、図版を含めると全二八巻にもなる『百科全書』は知識を広範に拡散する手段にはなりえないと考えたヴォルテールが刊行した「ポータブルな『哲学辞典』」を考えてもよいかもしれない。これらの作品は、野心的で啓蒙的な「敢えて知れ」の精神に満ちている。

しかし、十八世紀を理性の光がまばゆく輝く世紀、としてみ考えると、どうにも収まりの悪い部分が出てくる。たとえば、デイドロとともに『百科全書』の編集に携わったグランベールは、有名なサロンの主催者タンサン夫人がさる騎士との熱愛の末に産み落とした私生児だった。ヴォルテールは、ニュートンの『プリンキピア』を翻訳した才女シャトレ夫人の愛人になり、彼女の城で著述活動に勤しんでいる。そのシャトレ夫人は文人サン＝ランベールとも恋に落ちて、彼の子どもを産んだ直後に死んでしまう。この時代の知的活動は、色恋沙汰と切り離すことができず、理知の光によって統御することのできない猥雑なエネルギに彩られているのである。

猥雑なのは彼らの私生活だけではない。知の最前線としての哲学や文学談義に加えて、賭け事やさまざま

な遊び、酒宴、ゴシップを伴うものだった当時のサロンから生み出された彼らの知的作物にも、「理性の進歩」といった理解では到底処理しきれない要素が常に見出される。さきに挙げたヴォルテールの『哲学辞典』巻頭を飾る項目「ABBÉ（神父）」は、「どこへいらつしやるのですか、神父さん？」という文章から始まっている。神父の娼館通いを揶揄する強烈な皮肉である。デイドロの『ラモーの甥』の登場人物ラモーの甥は「上等の酒を飲んで、うまいものをたらふく食い、きれいな女と転げまわってやわらかい寝床で休む」よりほかの幸福はないと断言する。『ダランベールの夢』三部作は、当時の最新の科学的知見を踏まえ、生物と無生物の境目はどこにあるのか、人間の感覚や自己意識とは何かという問いに果敢に挑戦した意欲作だが、ダランベールの夢精の様子を、あろうことか彼の恋人となるレスピナス嬢の口を借りて語らせている（「あの方は、どこかに手を隠してしまいました。なにか体の痙攣を感じているようでした。」「…」しばらく経って、あの方の口元にかすかな笑みが浮かぶのが見えました」）。

知と性とのこうした絡み合いは、もちろんこの時代に限ったことではない。十七世紀にはすでに「リベルタン」という言葉は「放蕩者」と「自由思想家（唯物

論者）」を二つともあらわす語だった。二十世紀には両者の結びつきは自明すぎて言及するまでもなくなつてゆくだろう。だが、たとえばリベルタン小説と呼ばれるボルノ的作品がしばしば唯物論思索に踏み入っていくように、あるいは『ダランベールの夢』が実践しているように、文体や思考の方法のレベルで知と性との二つのエネルギーが相互に影響する様は、十八世紀に一度その極点を迎える。理性の光が照らす昼の世界は、性的欲動が隠微に放散される夜の闇の世界を相伴っている。

「わが亡き後に大洪水よ来たれ」という先の警句も、光と闇のこの危うい均衡と決して無縁ではないように思われる。そこにあるのは進歩を信じて突き進む樂觀主義ではない。「大洪水」の危機はつねに現前している（その予感、世紀末に大革命として実現するだろう）。しかし、滅びの予感を湛えながらも、投げやりな憂愁の中に沈み込まず、現実をそのようなものとして一旦肯う不思議な明るさもここにはある。「今を楽しめ（Carpe diem）」というホラティウスの陽気な格律に、来るべき死の翳がひつたりと貼り付いているように。地球規模の、あるいは自分を取り巻くさまざまな環境の「危機」を思うとき、この不思議な明るさには見習うべきところが多いと感じる。

南砺紀行

福 家 崇 洋

昨年の夏休み、妻とともに富山にかけた。コロナ禍以来なので、三、四年ぶりになる。今回の目的は、かつて住んでいた時によく通った想い出の場所を再訪すること、もうひとつは城端線沿線にある南砺市立福光美術館と富山県立南砺福野高等学校の巖浄閣を訪ねることである。美術館と巖浄閣の訪問は、妻たつての希望である。

二日目の朝、富山市を出発して、高岡駅で城端線に乗り換え、電車にゆられて、福光駅で降りた。ここからタクシーで南砺市立福光美術館に向かう。この美術館には、地元出身の日本画家・石崎光瑤の絵画が数多く所蔵されている。登山家でもあった彼の絵は雄大で、鮮やかな色彩もあいまって、見る者の目に飛び込んでくる。美術館には、戦時期に福光に疎開していた版画家・棟方志功の作品もある。とくに「二菩薩釈迦十大弟子」の六曲一双屏風は圧巻である。文殊・普賢と釈迦の高弟たちの姿を彫ったものだが、無駄が削ぎ落と

された、弟子たちの独特のフォルムは神々しい緊張感が漂っていた。

そのあと私たちは、タクシーで福光駅に戻り、上りの城端線に乗って二駅先の福野駅で降りた。そこからすぐ近くの福野高校を訪ねた。じつは、福野を訪れたのはこれが二度目である。一度目は、私が富山大に在籍していたときに遡る。二〇一六年に歴史家の安丸良夫さんが亡くなり、その追悼大会を日本史研究会が行うことになった。報告を依頼された私は、あらためて安丸さんの書いたものに目を通すうちに、彼が高校時代までを過ごした福野の地を実際に訪ねてみたいと思うようになった。

この時も夏の暑い時期で、妻とともに休日に城端線の電車に乗って福野駅で降りた。居並ぶ山々と一面に広がる緑の田んぼが私たちを迎えてくれた。若き日の安丸さんに想いを馳せながら井波まで歩いたが、数時間にはかかったように思う。車はたまにすれ違うのだが、遮るものない炎天下で歩いているのは私たちと昆虫くらいである。井波にたどり着いて美しい街並みを見学したあとはさすがに疲れ果て、喫茶店で一服してから、タクシーで福野駅に帰ったことを憶えている。福野高校は安丸さんが卒業した学校で、一度訪ねたいと思っていたが、結局、果たせないまま富山を離れるこ

とになってしまった。

したがって、今回は、満を持しての福野高校訪問である。とはいえ、あくまでも休日の観光で、巖浄閣を間近で見たい妻の付き添いの体である。巖浄閣の名は戦後になって付けられたもので、もとは一九〇三年に富山県立農学校校舎として建設された。コロシアム様式とされる西洋建築は、散居村が広がる福野の地でさぞ目を引いたことだろう。巖浄閣では、福野高校同窓会事務局の竹下宏子さんにご案内いただいた。私はずっと安丸さんのことが気になっていたが、せっかくの機会である。同校のあゆんだ歴史や同窓生の輝かしい業績に関する展示をつぶさに見学し、巖浄閣の保存にかかわる物語りに耳を傾けた。しかし、一階の途中にあった資料コーナーで『福野新聞』復刻版や写真集などをみて、ついに抑えきれなくなってしまった。竹下さんに、自分が同校卒業生の安丸良夫さんを研究していることや、安丸さんに関する高校時代の資料を探していることなどを思わず吐露してしまった。さぞ驚かれたのではないかと思う。また悪い癖がでてしまったと少し反省したが、後の祭りである。

しかし、クライマックスは、そのあとに用意されていた。階段をのぼって、二階に移動したところ、広々とした空間に、生徒たちの集合写真がいくつかのボー

ドにはられて飾られているのではないか。ここに安丸さんが写っているものもあるのではないか、そう直感した私はボードにひとり走り寄った。一枚一枚探したところ、一九五三年三月の卒業時に撮影された安丸さんが写っていた。「普通科三ホーム」と写真下に説明があり、最後列の向かって右から四人目の人物のところ「安丸」と赤字で書かれていた。間違いない。研究史では知られていない写真だが、肖像権の問題でここに掲載できないのはつづく残念である。とはいえ、巖浄閣の歴史を学び、思わぬ成果をえて、福野の地をあとにすることになった。突然の申し出にも快く応じてくださった竹下さんにお礼を申し上げたい。

この話には後日談がある。私たちが京都に戻ってまもなくしてから、竹下さんが安丸さんに関する資料の写しを送ってくださった。福野高等学校生徒会が発行した『東雲』四号（一九五三年二月二十五日発行）掲載の安丸さんの詩「歌わない太陽」と、『同窓会報』三十四号（一九八六年八月一六日）掲載の「記念講演 日本の宗教と国民性（要旨）」である。とくに貴重な前者を引用しておこう。

十一月の太陽は歌わない
花の色と緑の光と

雲の乱反射とを歌わない。

南緯二十度の彼方に退いた彼は

自己の燃え上る生命の燃焼を押え

感情の激動を押え

自己の内深く身を沈めて

南の山際を冷い光を投げて通り過ぎる。

敗北ではない

感傷でもない

太陽は歌を止めて

南半球に退くのだ。

発行日の一九五三年二月下旬といえ、巖浄閣二階で見た卒業写真の時期とほぼ同じではないか。竹下さんのおかげで、福野を発つ直前の安丸さんが発表した詩を、その面影とともに今回初めて目にする事ができた。感謝の念に堪えない。安丸さんの詩は京大教養部時代の「一つの風景」『Agora』一号、一九五四年二月）があるが、約一年ほど遡ることができた。高校生までの安丸さんは人生の意味をぼんやりと考える少年だったというが、その一端をうかがうことができる詩景である。

昭島のおいしい水と出汁

守 岡 知 彦

二〇二三年三月に北白川の研究室を離れ、四月から東京都立川市にある国文学研究資料館に移った。新しい職場での私の仕事は人文情報学・デジタル人文学関連という点では以前とあまり変わらないものの、日本の古典文学作品やくずし字・かな文字といったそれまであまり扱ってこなかったものにも向き合わねばならないような気がするし、国書データベースの基となった国書総目録についても勉強する必要がある。また、引越越しをしていた頃にも生成AIの急速な進展があつて深層学習以降の急流にあまり追いつけてない間に（そして、引越越し作業で精一杯の間に）世間から取り残されている感じがして気が急いだ。とはいえ、まずは引越越しである、と自分に言い聞かせて自宅と研究室の引越し作業が続けていたが、結局、最後はともばたばたしてしまい、一年経つても自宅にも研究室にも空けていないダンボールが多数鎮座している始末である。そういう意味では今もまだ引越しは終わって

いないといえるかもしれない。

それはさておき、新しい職場である国文学研究資料館は多摩地域の中中部にある立川市にある。多摩地域は東京都西部に位置し、面積は東京都全体の半分強で、人口は約三分の一である。東京二十三区に比べて人口密度は低いが京都市に比べると人口密度は高い。一口に多摩といっても、J・R立川駅周辺のように商業施設が立ち並ぶ都会的な場所もあれば、奥多摩のような自然豊かな場所もある。タワーマンションや商業施設の他、工場、基地、少子高齢化が進み過疎化しつつある集落や集合住宅、山や川などの自然といった多様なものが混在した、多くの人が思い浮かべる東京とは異なる景色が多摩地区には混在している。

国文学研究資料館ではテレワーク化が進んでいることもあり、比較的遠方に住んでいる人も少なくない。土地勘のない場所どこに住むか悩んだが、長年の京都生活で長時間満員電車に乗るのはしんどいし、人混みも苦手だからほどほどに田舎の方が良いかなと思いながら物件を調べ始めた。最初は多摩川の近くとか楽しそうだなと思ったが、ハザードマップを眺めて諦めた。結局、お財布とも相談しながら、職場から自転車です十五分ぐらいの距離の二十四時間ゴミ出し可能な物件という条件で探した結果、立川市の隣にある昭島市

の北部にある古いマンションに決めたのだった。高度成長期のニュータウンにありがちなことだが、このマンションも居住者の高齢化が進んでおり、一階の庭付きの部屋ということもあって、自然にご近所付き合いが発生し、気がつけば娘は近所のおばあちゃんたちと仲良くなっていた。

引越と同時に小学校入学を迎えた娘はすっかりこの地に馴染んでいるように見えるが、私はというとまだ戸惑っている気がする。職場が変わったこともあるが、それ以上に、環境の変化、つまり空気とか水といったものの差に順応できていない気がする。引越して最初に驚いたのはヘリコプターや飛行機などの騒音で、これは米軍の横田基地や自衛隊の立川駐屯地、京都のドクターヘリの拠点に近いことなどがあるが、これは半年ほどで慣れてしまった。一方、空気に関しては、京都市左京区が比較的じめじめしているのに対し、この地は乾燥している。引越し前はカビとの戦いだったが、この冬には乾燥しすぎて肌や喉の調子が悪くなりついに加湿器を買ってしまった。ただ、夏に関してはスチームオーブンの中みたいな京都に比べて湿度が少ないこの地は過ごしやすい。また、昭島市の水道水は深層地下水のみを水源としていて、蛇口からミネラルウォーターが出てくるといってとちよっと大袈裟

かもしれないが、冷蔵庫で冷やしたただけの水がすごく美味しい。これは京都市の水道水とは格段の差だといえる。

しかし、カルシウムやマグネシウム、シリカなどのミネラルが豊富に含まれているということは出汁の旨味が出にくいことを意味しており、実際、この地域の料理店では出汁の風味が希薄なものが多く、しばらくして、私や妻（二人とも関西出身）は『出汁欠乏症』になってしまった。和食系における昆布だしの欠如もだが、インド・ネパール料理やタイ料理のお店でもしばしばなんか一味足りない感じがしてやがてその原因が水だと気づいた。つまり、京都の水は旨味成分が溶けやすく、どんな料理でも出汁が効いていたのだらう。いわば料理における隠された地域性を奏でるベースラインの役割を水が果たしていたことに気付かされた。ちなみに、紅茶は昭島の水の方が美味しい気がする。

さて、本稿のオチだが、AIの挙動が学習に使ったデータセットに依存するようとか、フレイムワークやUIが開発者やユーザーの振る舞いに影響してシステムやコンテンツに影響してしまう、みたいな感じにデジタル人文学に絡めることも考えたがそれも野暮な気がする。適当に撮った写真を後で眺めたときに見つけたもの（確かにその時見ていたはずなのにその場では

意識できなかったこと）、デリダの『プンクトゥム』的なものに引き寄せても良いが、それも今の気分にくわれない気がする。まともでないが締切が迫っているのでここで筆を置く。

京都と私

李 媛

はじめに

晴れた日に、夕暮れ時の京都を歩くと、建物や町並みが夕日に照らされて、心に温もりがじんわりと染み入る。初めて京都に来たのは、思い返せばもう20年も前のこと。その時、自分にとって京都がどんな特別な場所になるのか、そしてこれからの人生がどう展開するのか、予想もつかなかった。20年後に京都で仕事をしている自分の姿を想像すらできなかった。この20年で、京都には三回住み、留学や研究、仕事で長期間滞在した。そのため、京都に対する記憶は階層的に重なっている。そしてこの町は、私の人生において、思い

がけず重要な章を織り成してきた。

最初の京都

二〇〇四年六月一九日、土曜日に京都に最初に到着した。この日は理由もなく鮮明に記憶している。交換留学のため、同じ大学、同じ専攻の四人の女子学生と一緒に北京の首都空港から関西空港へ飛んだ。関西空港に着陸し、機内の乗客が次々と下りていく中、私たち四人は初めての海外生活、しかも一年間の留学だという不安から、最後まで飛行機内に残ってしまった。

客室乗務員が近づいてきて、「降りないと、そのまま北京に戻ることになりますよ」と言って、不安を和らげてくれた。やっとの思いで降りて、関西空港へ向かう瞬間、普通の人々の流れに身を任せ、対面の人々が中国語で話してくれるかもと一瞬錯覚した。

京都で最初、北区の鴨川近くの学生寮に住んでいた。毎日自転車で片道五〇分かけて京都コンピュータ学院駅前校に通っていた。情報処理の授業を受ける一方、京都で初めてホテルやコンビニでバイトもした。週末には、よく地図をカバンに入れ、自転車で京都の町を自由に探索していた。夏が終わるころには顔も体も真っ黒になって、自分でもびっくりした。二〇〇四年十二月五日、日本語能力試験1級を受けるため、初めて

京都大学の吉田キャンパスにきた。試験には無事合格し、工業化学科前の美しい銀杏の木が記憶に強く残っている。二〇〇五年二月、友人に誘われ、バイトの収入で北海道へ旅をした。雪が一番多い時期の二月初旬、伊丹から函館へ向かった。函館、小樽、昭和新山、札幌を巡る二泊三日の旅だった。函館の温泉から見た冬の海や、小樽の雪景色に流れるオルゴールの音、そして旅行バスで通過した北大のそばの通りは、今もずっと心に残っている。

京都での一年間の交換留学で、日本語の漢字と中国の簡体字の違いに強い関心を持ち始めた。そして、この体験から「異郷有悟」という感覚が心に深く刻まれた。学部卒業後、しばらく民間企業で働いた。およそ五年後、大学院進学を考えるうちに、北海道の記憶がよみがえり、北海道大学で日本古辞書研究を専門とする国語学の先生の研究室に進むことを決め、そこで学ぶために努力を重ねた。

京都では、初めての海外留学生生活であり、多くの困難に直面した。でもその度に、京都の地元の人々から温かい支援を受けて乗り越えることができた。北区の個人経営の電気屋で小型の炊飯器を買ったことがきっかけで、その店のオーナー夫婦が、日本に来たばかりの私を、一家の三人の娘と共に（黄緑色の浴衣を貸し

てくれ、まるで四人目の娘のようだと言われながら）祇園祭へ連れて行ってくれた。その後、京都でノートパソコンのディスプレイが壊れて途方に暮れた時も、オーナー夫婦が温かく助けてくれた。その頃はまだ日本語でコミュニケーションを取るのがやっとだったけど、京都のことを案内してもらったり、自宅に食事に招かれたりする体験は、はじめて異国で過ごす私にとって非常に感動的で、心強かった。

最初の京都滞在、本当は桜を見て帰国する予定だった。しかし、さまざまな事情で三月の終わりに帰国せざるを得なくなり、その年の桜がどうだったのかは、ずっと心に残っている。

二回目の京都（最初の人文研）

二〇一七年三月、北海道大学文学研究科の博士課程を修了し、研究生・修士課程・博士課程として過ごした六年間を終えた。日本学術振興会の外国人特別研究員として採択され、その年の秋十月から京都大学人文科学研究所で研究し始めた。この時点で、初めて京都に留学してから十二年ほど経っていた。その間、学会発表や文献調査で何度も京都を訪れていたが、滞在は大抵一週間以内で、「旅人」のような気持ちが強かった。時々、昔の通学路やアルバイト先の近くを通ると、

懐かしい気持ちじゃわいわと湧いてくることがあった。学振の特別研究員として二年間、主に北白川東小倉町の人文研分館のプロジェクト室で研究していた。規定上、毎日十七時に事務職員が退勤する時間に合わせて鍵を返し、退室しなければならなかった。作業が残っている日はほとんどで、十七時以降は自転車で吉田キャンパスの図書館本館に移動し、閉館の十時まで研究と作業を続けていた。最初は修学院にある京都大学国際交流会館に住み、一年後に一乗寺の民間マンションに引っ越した。二度目の京都滞在は研究などで忙しく、初めての滞在時のように京都を回することは少なかったが、夜に自転車で北白川通りを走るときのそよ風がとても心地よかった記憶がある。

その時、二〇一八年五月に台北で文献調査や学会発表のため二週間ほど滞在していた。誠品書店で『京都一年』という本に出会った。これは一九七〇年代最初に、台湾大学の林文月先生が京都大学人文科学研究所分館で訪問研究者として過ごした一年間の記録だった。毎日の調査後、ホテルでこの本を読んでいた。その期間中、台湾大学文学院で知り合いの日本語学科の先生と待ち合わせをして、文学院の中庭で立ちながら、林文月先生が在職中の様子を想像していたことが、今となっては懐かしい思い出となっている。

三回目の京都（二回目の人文研）

その後、北海道大学文学研究院の学術研究員、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）のポスト・ドクトラル・フェローを経て、二〇二三年十月に京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センターの助教に就いた。四年前には、前身となる東アジア人文情報学研究センターに学振の外国人特別研究員として在籍していたため、着任した時は感慨深かった。『京都一年』を読んだ時、林文月先生が京都滞在から四年後に国際会議で参加した際、再び人文研分館を訪れたエピソードが心に深く響いた。「在我所認識の人當中、平岡武夫教授和田中謙二教授先後都退休了。四年前去開會時、順便過訪在京都一年間每日必到的人文科學研究所。夕陽斜照在那一條蒼老的走廊上、許多研究室門上掛著的牌子都換了陌生的名字、使我不敢輕易敲那些一度熟悉的門扉。『物是人非』、想不到重臨異鄉的故地、竟會有這種感覺！只有那一位中年的清潔婦還記得我、站在下班後的薄暗樓梯口、同我寒暄了一會兒。」

たまに、現在割り当てられている研究室に入る時、扉にかかっている自分の名札を見て、林文月先生の本に書かれていたこの内容を思い出し、一瞬、映画のワンシーンのように、目の前の名札に多くの歴任者の先

生方の名前が速いスピードで入れ替わるような錯覚に陥ることがある。分館の歴史とその建物の重厚さに圧倒される。毎日、分館に出勤し、長い回廊に足を踏み入れる瞬間、まるで外の世界とは異なる時空間に入ったような感覚になる。先日、偶然読んだ『人文 第五九号』で、同じセンター教員であるクリスティアン・ウィッテルン先生が「研究の場」として書いた文章に出会った。「分館で研究生生活を始めた時、館内は不思議なことに外の世界とは違うペースで時が流れていると感じた」との言葉を読み、ウィッテルン先生と似た感覚を持っていることに、不思議と納得した気持ちになった。

学振の特別研究員として人文研にいた時と違い、今は時間を気にせず研究室で働ける。着任して一ヶ月経った頃、一度、夜遅くまで作業しようと決心し、十九時半まで研究室で作業を続け、休憩しようと廊下に出たら、真つ暗な空間が広がっていた。夜はいつでもどこか他の教員室に明かりがあるものだが、この日は三連休の前日だったためか、たまたま皆が帰ってしまい、自分だけが残っている状況だった。巨大な古い建物に自分しかないことを実感した瞬間、怖くなって、急いで片付けて家に帰ることにした。研究所の大門を出た時、四年前に毎日十七時になると自転車で吉田キャ

ンパスの図書館本館へ移動していた「ルーティン」を思い出して、思わず笑いがこぼれた。

着任してから半年が経ち、さまざまな仕事や研究に追われるうちに、ついに夜遅くまで残ることが増えた。締め切りのプレッシャーが暗闇の恐怖を上回るようになり、夜間の不安もだいぶ薄れてきた。その代わり、夕方になると、廊下の灯りをつけることを心掛けるようになった。夕暮れ時、玄関から入る方向の右側廊下の灯りが一列に点灯すると、その中の三番目くらいの灯りが（少なくとも自分には）わずかに列から左にずれているように見えた。この小さなズレが、全体の光りにいきいきとした流動感を与えているように感じられた。

人文研は長年にわたり、漢字史料の研究とその情報化に取り組んできた。改組された人文情報学創新センターでは、従来の伝統を受け継ぎながら、この時代に相応しい新しい価値を創り出す人文情報学を展開していく。自分もこの時代の流れの中で、もうすぐ百年の歴史を迎える分館の建物で、新しい時代の人文情報学の研究に力を尽くしたいと思う。

おわりでもない

京都と私の物語はまだ続いている。

人生が盛大な体験であることを、徐々に理解してきただよに思う。人間はみな、自分だけの時間軸（時間体験）に沿って生きている。同時に、他人の人生の時間軸や、組織や町の歴史的時間軸とも重なり合う。振り返ると、自分の人生軸と、千年の歴史を持つ京都・京都の歴史軸が、不思議な縁で何度も交差してきた、そして今も交差し続けていることがわかる。

二回目の京都、一回目の人文研に在籍した際に、一度京大の職員の友人と林文月先生の『京都一年』の話をしたことがある。その時、友人は「そうか。李媛さんが『京都二年』という本を書いたら、ぜひ読みたいです」（当時の研究員の任期は二年間だった）と言ってくれた。三度目に京都に来て、ふとその話を思い出して、「書けるかな」とひとり言を漏らした。ただ、書籍の形にこだわらず、仕事と人生の記録として、京都で過ごしてきた日々、そしてこれから過ごしていく日々を記しておきたいと思う。

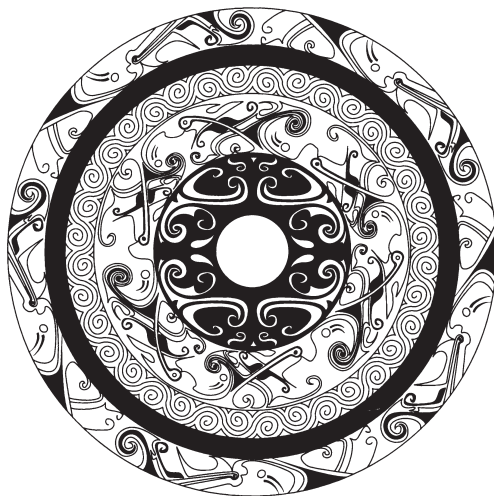
いずれまた京都を離れる時が来るだろう。それまで、京都で与えられた時間を生かして、できる限りのことを精一杯やりたい。そうすれば、別れの時に未練なく、しっかりと別れが言え、次の目的地向かうことができるだろうと心から思う。

i 注

林文月『京都一年』、三民書局股份有限公司、修訂二
版六刷、二〇一八年一月。初版一刷、一九九六年五月。
p. 205

ii

クリスティアン・ウィツテルン「研究の場」『人文
第五九号』人文二〇一二、人文科学研究所。p. 27



書いたもの一覧 二〇二三年四月～二〇二四年三月（氏名五十音順） ●は単行本

池田 巧

Some Grammatical Features of Luzu. Nohara Masaki and
Ikeda Takumi (eds.) *Grammatical Phenomena of Sino-
Tibetan Languages* 6. Kyoto University. 二月

石井 美保

裏山のほとりで あき地 六月
蔵の中 あき地 六月

途上の実験的プロジェクト、「実験性の生態学」

人文 七〇号 六月

科学と動員（一）

あき地 七月

科学と動員（二）

あき地 七月

水底の魚（一）

あき地 八月

水底の魚（二）

あき地 八月

「聞くこと」離れた世界つなぐ

朝日新聞 八月三〇日

縁側の椿（一）

あき地 九月

縁側の椿（二）

あき地 九月

絹糸のひかり（一）

あき地 十月

絹糸のひかり（二）

あき地 十月

心（この）る一冊『鳴りひびく鐘の時代に』

こどもの本 十巻一号 十月

オルガンの歌（一）

あき地 十一月

オルガンの歌（二）

あき地 十一月

埠頭にて

あき地 十二月

遠い島影（一）

あき地 十二月

A Little Girl Lost

ユリイカ 五六巻一号 一月

海鳴りの底、亡き人の声

群像 七九巻二号 一月

少女のまなざし、影とひかり

文藝別冊 一月

遠い島影（二）

あき地 一月

月と海鳴り（一）

あき地 一月

月と海鳴り（二）

あき地 二月

猫たちのいるところ

吉田寮紹介パンフレット 二月

月と海鳴り（三）

あき地 二月

物語の外で（一）

あき地 三月

物語の外で（二）

あき地 三月

石川 禎浩

毀誉相半ばする革命のカリスマ（毛沢東伝ほか） 重松伸司

他編著『アジア人物史 第二一巻 世界戦争の惨禍を越え
こ』 集英社 四月

Workshop on Contemporary Chinese History（中国当代史
研究工作坊）. *Modern Asian Studies Review*, 14 Toyo

Bunko

毛沢東、書家として詩人として

田中仁さんの口ぐせ

遼 八八号 七月
拓蹊 五号 八月

伊藤 順 二

二〇二二年の歴史学界 回顧と展望 ヨーロッパ(近代―ロ

シア・東欧・北欧)

史学雑誌 一三二編五号 五月

戦時下生環境ガイド 二三 ガリボリの崖、クルクキリセの

高地 https://hbh.center/06-issue_052/

生環境構築史 六号 六月

稲本 泰生

● 釈迦信仰と美術―作品解釈の新視点(編著)

思文閣出版 八月

『釈迦信仰と美術―作品解釈の新視点』序説 稲本泰生編

『釈迦信仰と美術―作品解釈の新視点』 思文閣出版 八月

翻訳 マイケル・ウイリス「聖地と光の幻影―女神マリー

ーチャーをめぐる」(共訳) 稲本泰生編『釈迦信仰と美術―

作品解釈の新視点』

思文閣出版 八月

安塞大仏寺四号窟における図像構成の意義と北朝期の仏伝表

象 稲本泰生編『釈迦信仰と美術―作品解釈の新視点』

思文閣出版 八月

● 「見える」ものや「見えない」ものをあらわす―東アジアの

思想・文物・藝術(共編)

勉誠社 三月

北宋大中祥符年間における舍利莊嚴の位相―長干寺阿育王塔

の埋納を中心に 外村中・稲本泰生編『「見える」ものや

「見えない」ものをあらわす―東アジアの思想・文物・藝

術』

勉誠社 三月

龍門石窟への視線と中国文物をめぐる営為―「日本上代美

術」基準の文物観から遺跡調査・現地保存へ―重田みち

編『日本の伝統文化』を問い直す』 臨川書店 三月

岩城 卓 二

「勸農」と「取締」の幕末社会 岩淵令治・志村洋編『日本

近世を見通す4 地域からみる近世社会』

吉川弘文館 十一月

WITTEN, Christian

Considerations for an interactive analytical search proce-

dure in a large text corpus of premodern Chinese texts.

東洋学へのコンピュータ利用・第三六回研究セミナー

七月二八日

岡澤 康 浩

範例と二人の哲学者―推論する動物たちの生態史のために

思想 一一九四号 十月

トピックス 日英バイリンガル・ワークショップ

Techniques of the Shichōsha: On the Technoscientific

Formation of Cultural Subjects (視聴者)の系譜:ある

文化的主体の科学技術的形成

REPRE 四九号 十月

岡田 暁生

●ごまかさなクラシック音楽(共著)

新潮社 五月

●配信芸術論(編)

アルテスパブリッシング 十月

菊地 暁

雑本ガイドとしての『民俗学入門』、あるいは私の雑本三昧

近代出版研究 二号 四月

横山茂雄 ロングインタビュー…川島昭夫・吉永進一らとの交友、そして古本収取話(インタビュー)

近代出版研究 二号 四月

遠くを旅して 近くを歩いて 1 効用は「想定外」にあり

共同通信配信 四月

遠くを旅して 近くを歩いて 2 芳賀日出男さんのまなざし

共同通信配信 五月

遠くを旅して 近くを歩いて 3 路上観察のススメ

共同通信配信 六月

火中の栗を拾う—京大人文研で「日本の伝統文化」を問い直すということ—

人文 七〇号 六月

書評「政治風土」という習俗の総体に切り込んだ意欲作
政治／民俗学的課題を考えるための重要な指針 室井康成
著『政治風土のフォークロア』

図書新聞 三五八七号 七月

京都・左京区研究 0—1 伝統都市の拡張 近代知と出会う空間
The KYOTO 七月七日公開

遠くを旅して 近くを歩いて 4 一人一人の戦争

共同通信配信 七月

コメント 二二世紀の家族研究のために—生活史と学校資料と—
京都民俗 四一号 七月

菊地暁、《柳田國男和民俗学的近代・奥能登の「饗之事」的二十世紀》、二〇〇一年

林承緯他編『日本学指南』 五南出版 七月

瀝青会、《今和次郎「日本的民家」再訪》、二〇一二年

林承緯他編『日本学指南』 五南出版 七月

岩本通彌編、《世界遺産時代の民俗学・日韓對於全球標準接受的比較》、二〇一三年

林承緯他編『日本学指南』 五南出版 七月

遠くを旅して 近くを歩いて 5 こども風土記を求めて

共同通信配信 八月

日本の幽霊・妖怪との比較から、付、『蕃童ノ嗜好其他調査新高郡』の「おぼけ／ハニト」について

立命館言語文化研究 三五卷一号 九月

遠くを旅して 近くを歩いて 6 「女の一生」を探索した女の一生

共同通信配信 九月

京都・左京区研究インタビュー ズーッと芸術も育成 京都市動物園一二〇年 アレが「窮地」救う? (インタビューア—)

The KYOTO 九月二九日公開

ライフヒストリーレポートの書かせ方…とある民俗学講師の場合
現代思想 五一卷一一号 九月

スペシャルトーク…伝承されるものには無数のバリエーションがある
季刊音楽鑑賞教育 五五号 十月

遠くを旅して 近くを歩いて 7 生活を守る

共同通信配信 十月

遠くを旅して 近くを歩いて 8 地域アートは現代の風流

共同通信配信 十一月

遠くを旅して 近くを歩いて 9 一番大切なこと

共同通信配信 十二月

三枝子抄―フェミニスト・エスノグラフィ―江馬三枝子の軌跡―大塚英志編『接続する柳田國男』 水声社 十二月

● ライフヒストリーレポート選2023 (編著) 京都大学民俗学研究会 十二月

座談会 京都・左京区研究 六一― 謎の京都アングラ誌

ベリカンクラブ 八〇年代カオス解剖

The KYOTO 一月一二日公開

座談会 京都・左京区研究 六一― タモリ倶楽部と同調?

京都アングラ雑誌 八〇年代に発刊の背景

The KYOTO 一月一九日公開

遠くを旅して 近くを歩いて 10 災害と民俗学徒

共同通信配信 一月

遠くを旅して 近くを歩いて 11 手紙という資料の面白さ

共同通信配信 二月

● 記念誌 菅豊先生還暦記念 日本民俗学講習会 (編著) 同

会世話人 二月

遠くを旅して 近くを歩いて 12 スマホ時代の歩き方

共同通信配信 三月

火中の栗を拾う―京大人文研で「日本の伝統文化」を問いつ

すということ―重田みち編『日本の伝統文化』を問いつ直す 臨川書店 三月

八瀬散歩・フィールドワークと座談会 (共著) 京都精華大学伝統産業イノベーションセンター編・発行『京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター イヤーブック二〇二二』 三月

金 智慧

가부키의 이에노게이・전통의 보존과 혁신의 장으로서의 역할에 주목하여 (歌舞伎の「家の芸」・伝統の保存と革新の場としての役割に注目して) 日本研究 九八号 十二月

ミュージックと「いにしへまなび」 人文 七〇号 六月

日常語のなかの歴史29十八番 鴨東通信 一一六号 五月

倉本尚徳

玄奘―その理想と現実 妹尾達彦他著『ユーラシア東西二つの帝国―アジア人物史第三巻』 集英社 八月

梁武帝「断酒肉文」訳注 (共訳) 東方学報 九八冊 十二月

晩年の道宣による天竺中土説の克服―見えないものによる三宝の住持と見えるものとの感応 外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす―東アジアの思想・文物・藝術』 勉誠社 三月

吳 孟 晋

動向 美術『中国年鑑二〇二三』 中国研究所 五月

揚州をめぐる詩書画の連環—袁江・王雲筆樓閣山水図屏風

(京都国立博物館蔵) について 曾布川寛・宇佐美文理編

『中国美術史の眺望—中国美術研究会論集』

汲古書院 十一月

Persimmons and Chestnuts. Translated by Tomo YO-SHIZAWA and Melissa M. RINNE. *Zen: Path to the Heart*, Ryokoin. 十一月

長尾雨山と内藤湖南の中国書画観—林平造(号蔚堂)の収集品をめぐる(特集 東アジア文人画の「近代」)

美術フォーラム二一 四八号 十二月

清・倪田画 故事人物図 四幅(特輯 梅舒適コレクションの明清書画) 國華 一五三九号 一月

中国の「超現実主義」と外山卯三郎—倪貽德によるシュルレアリスム絵画理論の翻訳をめぐる 速水豊・弘中智子・清水智世編著『シュルレアリスムと日本—「シュルレアリスム宣言」一〇〇年』 青幻舎 一月

●『移ろう前衛—中国から台湾への絵画のモダニズムと日本』

中央公論美術出版 二月

明清絵画にみる文人器玩のあり方 外村中・稲本泰生編

『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす—東アジアの思想・文物・藝術』 勉誠社 三月

森琴石ゆかりの来船清人の動向について 重田みち編『日本
本の伝統文化』を問い直す』 臨川書店 三月

古 勝 隆 一

『講周易疏論家義記』に見える「義家」について

余嘉錫の章学誠理解—継承と批判 陶徳民・吾妻重二・永田

知之編『中国学の近代的展開と日中交渉』 勉誠社 十二月

南北朝時代における仏教と軍事—僧伝の検討 宮宅潔編『暴

力のありか—中国古代軍事史の多角的検討』 臨川書店 三月

后稷は天に配せられたのか—『詩』大雅「生民」から『孝経』へ 外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす—東アジアの思想・文物・藝術』 勉誠社 三月

太極殿および大極殿をめぐる文学作品四篇訳注 外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす—東アジアの思想・文物・藝術』 勉誠社 三月

松崎懺堂の和習重視をめぐる 重田みち編『日本の伝統文化』を問い直す』 臨川書店 三月

小 関 隆

The 1960s and the Rise of Thatcherism ZINBUN 54

書評 山本通『チョコレートのイギリス史—企業フィランソロピーの源流』 神奈川大学評論 一〇五号 三月

小堀 聡

障がい児の逸失利益：目指す社会の鏡

毎日新聞 四月二七日

The 20th Century around Tokyo Bay: Life, Production and Environment. Fujihara Tatsushi (ed.) *Handbook of Environmental History in Japan*. MHM Limited. 四月

転換の一九三〇年代～六〇年代：統制経済をへさんだ経済成長（共著） 高度成長と公害 中西聡編『日本経済の歴史』列島経済史入門「第二版」名古屋大学出版会 五月

脱炭素電源法案：「原発運転が責務」の危険性

毎日新聞 五月二五日

「維新」の行政：普遍偏重と個別軽視

毎日新聞 六月二二日

安倍晋三回顧録：目引くコロナの「反省」

毎日新聞 七月二七日

安全保障と軍勢力：不断の議論と監視を

毎日新聞 八月二四日

関東大震災：政府、東京都の怠慢

毎日新聞 九月二八日

「放置禁止」条例案：コロナ対応と同根

毎日新聞 十月二六日

気候変動問題と日本：新たなルール作り必要

毎日新聞 十一月二三日

Book Review Sinan Levent. Sekiyu to nashonarizumu: Chūtō shigen gaikō to "Sengo Asiaslugi" [Oil and Nationalism: Middle East Resource Diplomacy and "Post-

war Asianism"]. Kyoto: Jimbun Shoin, 2022. *Japanese Research in Business History* (40). 十二月

自民党裏金疑惑：問われる日本の国家像

毎日新聞 十二月二八日

政治とカネ：中途半端な結末許すな

毎日新聞 一月二五日

人新世のなかの戦後日本…地球と地域とからみる 松浦正孝

編著『戦後日本』とは何だったのか…時期・境界・物語の政治経済史』 ミネルヴァ書房 二月

新型コロナ4年…偏在と不安定性の加速

毎日新聞 二月二二日

国際女性デー…先達に敬意を

毎日新聞 三月二八日

酒井 朋子

生きる身体のおどろおどろしさ

人文 第七〇号 六月

双子のクレインが見下ろす町

月刊みんぱく 八月

ロ・エルミータのアルピジェリスタたち 大島博光記念館アルピジェラ展二〇二三「チリ軍事クーデター五〇年 1973.9.11を忘れない」

バンシーの話

群像 九月

「きれい」と「きれいいじゃない」の人類学 第一八回京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの挑戦」

地域社会の調和ある共存に向けて」報告書 九月

Exhibition "Never Forget September 11, 1973" at Oshima Hakko Museum, Japan (共著) INMP Newsletter 九月

笑いの向こうにみる紛争と分断の経験―北アイルランド・ベルファストの日常経験の多面性

季刊民族学 一八六号 十月

●汚穢のリズム―きたなさ・おぞましさの生活考（共編著）

左右社 一月

佐藤 淳 二

〈仮死〉と〈亡霊〉の配信：三つの神学の彼方へ 三輪眞弘（監修）・岡田暁生（編）『配信芸術論』

アルテスパブリッシング 十月

菅原 百合絵

書評 Jacques Berchold. *La Nouvelle Héloïse. Le lieu et la mémoire*

日本一八世紀学会年報 六月

欲望と幻滅

文藝界 二〇二三年六月号

クレリエール

群像 二〇二三年七月号

『週刊新潮』編集部の思い出

二〇二四年三月号

忘我（巻頭表現・連作八首）

文藝界 二〇二四年一月号

薄暮の闇（連作十五首）

短歌研究 二〇二四年二月号

モナドの雫（連作七首）

短歌（角川） 二〇二四年三月号

天使がとほる（連作二〇首）

第二四回現代短歌新人賞受賞第

一作）

歌壇 二〇二四年四月号

パステイーシュ（連作八首）

朝日新聞（夕刊）三月二三日

解説（栗文） 野をゆく人の省察 三枝昂之編『前川佐美雄

歌集』

書肆侃侃房 八月

瀬戸口 明 久

牧野富太郎の山歩き―植物採集の王国

ユリイカ 五五巻五号 四月

巨大なものとしての科学―一九六〇年代科学論におけるポストヒューマニズム 思想 一一九四号 十月

機械化時代の音楽・科学・人間―兼常清佐のピアノの実験三輪眞弘監修・岡田暁生編『配信芸術論』

アルテスパブリッシング 十月

●災害の環境史―科学技術社会とコロナ禍

ナカニシヤ出版 一月

高井 たかね

●中国建築と日本 田中淡著作集3（共編）

中央公論美術出版 二月

●東アジア伝統医療文化の多角的考察（共編）

臨川書店 二月

解題（共著）

藤井恵介・高井たかね編『中国建築と日本

田中淡著作集3』

中央公論美術出版 二月

高木 博 志

【解説】『異国の夢二』と併走して ひろたまさき『異国の夢

二』

講談社 六月

星野桂三の眼『少女たち―発掘された珠玉の名品』

青幻社 八月

●近代京都と文化―「伝統」の再構築（編著）

近代天皇制と陵墓問題—世界遺産「イコモス評価書」を読む
思文閣出版 九月

歴史科学 二五六号 二月

●近代天皇制と伝統文化—その再構築と創造 岩波書店 三月

岩井忠熊先生と現代史 人権と部落問題 九八二号 三月

【史料紹介】『日々記（池坊専正日記）』 明治八年一月（共著）
池坊文化研究 六号 三月

明治維新と天皇制—古都京都・奈良の形成

龍谷史壇 一五八号 三月

高 階 絵里加

バリ万国博覧会（一九三七年）における日本の展示について

日仏美術学会会報 四二号 八月

一九三七年バリ万博日本館における「日本の伝統」 重田みち編『日本の伝統文化』を問い直す 臨川書店 三月

立 木 康 介

Division du sujet: Foucault/Lacan. Pierre BRUNO *et al.*
(dir.), *En finir avec la psychanalyse ?*, Éditions de l'insu

六月

書評 どこまでも動的なクレペリン像—精神病の〈発明〉と

精神医学の「制作」 渡辺哲夫著『精神病の〈発明〉』クレペリンの光と闇 週刊読書人 三五〇九号 十月

●露出せよ、と現代文明は言う 電子版

河出書房新社 十一月

●100分de名著 フロイト 夢判断 NHK出版 三月

都 留 俊太郎

Irrigation pumps in late colonial Taiwan: Farmers' utilization of technology and the transition to rice cultivation, *Modern Asian Studies*, 57(6), 五月

台湾農業における「技術の時代」—生産管理の導入と模造・改造農機具の普及を事例に

東アジア近代史 二七号 六月

台湾とウクライナの歴史を架橋するために—今、なぜ「危険な言語」か? *La Revue Orienta* 九一卷一〇号 十月

直 野 章 子

針路二一 広島サミット イラクの「ヒロシマ」

神戸新聞 五月二八日

針路二一 ガザ空爆 失われる幼い命

神戸新聞 十月三十一日

被爆体験と核兵器廃絶の間 科学者集会実行委員会編『原水

爆禁止二〇二三年世界大会科学者集会の記録 核を含む大

軍拡の嵐の中、大学・学生・高校生から平和の発信』

十二月

生の傷つきやすさとケア責任

社動研通信 六二号 二月一日

Setting the Stage: Outlining the Symposium's Thematic Landscape. Special Issue: The Ontology of Memory and

the Horizon of History, Part III. ZINBUN 54. 三月
Dual Edge of Fantasy in Traumatic Recollection: Response
to Dr. Haaken's Keynote Lecture. Special Issue: The
Ontology of Memory and the Horizon of History, Part
III. ZINBUN 54. 三月

From Experience to Anti-Nuclear Convictions: Early Years,
Crises, and Evolution of the *Nihon Hidankyo*. ZINBUN
54. 三月
針路二一 ケアの手 災厄を経て見えるもの
神戸新聞 三月二八日

永田 知之

●中国学の近代的展開と日中交渉（共編） 勉誠社 十二月
十九世紀中国の知識人が見た章学誠とその言説—史論家・思
想家への道／敦煌学が開いた漢字文化研究の新世界／吉川
幸次郎と『東方文化研究所漢籍分類目録 附書人名通
検』／あとがき 陶徳民・吾妻重二・永田知之編『中国学
の近代的展開と日中交渉』 勉誠社 十二月

（張西艶・凌天元訳）陳寅恪論及敦煌文献雜記—以利用徑路
为中心 童嶺編『域外漢籍研究集刊』二六輯
中華書局 十二月

行きて帰りし書物—漢籍の往還をめぐる— 京都大学人文
科学研究所附属人文情報学創新センター編『続・漢籍の遙
かな旅路—日本への旅路』 研文出版 二月

悪事八〇〇キロを走る『興膳宏先生を偲ぶ』 京都大学

大学院文学研究科・文学部中国語学中国文学研究室 三月
「表状箋啓書儀」試論—形成の過程及び日本の古往来との比
較 敦煌写本研究年報 十八号 三月

中西 竜也

Ma Dexin's Criticism of Saint Veneration: "Chinese"-Fla-
vored Islam Formed by a Denominational Conflict. Ka-
zuo Morimoto and Sajjad Rizvi (eds.) *Knowledge and
Power in Muslim Societies: Approaches in Intellectual
History*. Gerlach Press. 六月

『天方詩経』アラビア語韻文の敢然たる翻訳—19世紀中国
ムスリムによる非ムスリムとの信頼関係の構築 野田仁編
『イスラームからつなぐ3 翻訳される信頼』 三月
「ムーミン」に埋め込まれた信頼
イスラーム信頼学 News Letter No.4 三月

野原 将揮

浅談秦簡中的「埴字」 出土文献 十四号 六月
辞典項目…戦国時代の文字資料、竹簡を用いた研究、木簡を
用いた研究『漢字文化事典』 丸善出版 十一月
特別寄稿…国際シンポジウム「出土文献與漢字發展史国際学
術検討会」に参加して

●Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 6
Typology and Historical Change. NOHARA Masaki and
中国出土資料学会会報 七十七号 十二月

IKEDA Takumi (eds.) Kyoto University. 二月

Another character for the word "rice plant" in Old Chinese, *BSOAS* (*online*) 三月

安徽大學藏戰國竹簡『仲尼曰』譯注(1) 雲漢 二号 三月

平岡 隆二

開陽丸引き揚げ文書と梅文鼎『曆算全書』

洋学 三〇号 五月

キリシタンと時計伝来 大橋幸泰編『近世日本のキリシタンと異文化交流』 勉誠社 七月

「キリシタンと時計伝来」関連史料 大橋幸泰編『近世日本のキリシタンと異文化交流』 勉誠社 七月

●東アジア伝統医療文化の多角的考察(共編)

臨川書店 二月

FORTE, Erika

玄奘のコータン来訪とドモコのトブルクトン遺跡 近本謙

介・影山悦子編『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』

臨川書店 十二月

福家 崇洋

大岸頼好と国家改造運動 軍事史学 五九卷一号 六月

戦時下の新村出 高木博志編『近代京都と文化「伝統」の再構築』 思文閣出版 九月

概説 新世界秩序の相剋とファシズムの台頭 井野瀬久美恵

(責任編集)『つなぐ世界史』三 近現代/SDGsの歴史的
文脈を探る 清水書院 九月

社会大衆党結党過程の検討 法政大学大原社会問題研究所・
榎一江編著『無産政党の命運 日本の社会民主主義』

法政大学出版局 三月

史料紹介 生駒ダンスホールと「戦争ごっこ」

生駒市史編さんだより 三号 三月

「天平文化」顕彰の思想 奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書3 vol.3 奈良に蒔かれた「言葉Ⅲ 近世・近代の思想」』

京阪奈情報教育出版 三月

藤井 律之

書評 岡田和一郎・永田拓治編『漢とは何か』

日本秦漢史研究 第二四号 十一月

藤原 辰史

●Handbook of Environmental History in Japan (編著) Amsterdam University Press/Japan Documents. 四月

座談会 いとうせいこう×藤原辰史「植物の夢をみる 多孔性、8 Kの眼、詩」 ユリイカ 五五巻五号 四月

チンブンカンブン大学教育学部ゼミ 第二十六講 子どもたちとの勉強 クーヨン 二八巻五号 四月

新型コロナウイルス感染症が浮き彫りにした社会病理 池上

甲一・斎藤博嗣編『テーマで探究 世界の食・農林漁業・環境1 はんとうのグローバルゼーションについて』 四月

座談会 藤原辰史×堀川恵子「歴史の地層を掘る―聞くことと書くこと」 世界思想二〇二三年春号 五十号 四月

座談会 フードロスと人間の使い捨て

POSSE 五三号 四月

羅針盤 記憶つなぐ歴史と風土 山陰中央新報 四月三十日
穴塚の里山で考えたこと

五斗蒔だより二〇二三年五月号 四〇二号 五月
チンブンカンブン大学育学部ゼミ 第二十七講 大学食堂の任務 クーヨン 二八巻六号 五月

「空気の力学」強く働く

共同通信配信（北海道新聞 他多数）五月十一日
食と農から社会を変える 第六十七回兵庫県母親大会 記録集 五月

戦時下生環境ガイド「4」平原―塹壕と平地、第一次世界大戦を中心 生環境構築史 六号 六月

戦時下生環境ガイド「5」工場―封鎖による生存条件の損害 生環境構築史 六号 六月

論点「2」原爆の遺品が語るもの―石内都『From ひろしま』からの思考 生環境構築史 六号 六月

チンブンカンブン大学育学部ゼミ 第二十八講 大学新聞の意味 クーヨン 二八巻七号 六月

思考の源泉としての水俣

水俣コラム 六月

巻頭インタビュー 食と農の仕組みを変え、平和への流れを食卓から社会を考える Table 四九一号 七月

チンブンカンブン大学育学部ゼミ 第二十九講 生ごみを出さない クーヨン 二八巻八号 七月

各自核論 重い負担、問われる意義 北海道新聞 七月七日
二〇二三年上半期読書アンケート

図書新聞 三六〇一号 七月
チンブンカンブン大学育学部ゼミ 第三十講 卒業論文の苦悩 クーヨン 二八巻九号 九月

座談会 藤原辰史×平松洋子「食から考える戦争と平和」
（上）食卓にあるもの

共同通信配信（北海道新聞他多数）（夕刊）八月七日
座談会 藤原辰史×平松洋子「食から考える戦争と平和」
（中）本から語る 北海道新聞（夕刊）八月八日

座談会 藤原辰史×平松洋子「食から考える戦争と平和」
（下）いま「食べること」 北海道新聞（夕刊）八月九日
日常の延長としての戦争 群像 七八巻九号 八月

羅針盤 何のため歴史を学ぶのか

山陰中央新報 八月二十日
食と農から始まる「自治」―権藤成卿自治論の批判の先に斎藤幸平・松本卓也編『コモンの「自治」論』

チンブンカンブン大学育学部ゼミ 第三十一講 集英社 八月

座談会 植物と生をめぐる対話 クーヨン 二八巻一〇号 九月

世界 九七四号 十月

チンプンカンブン大学教育学部ゼミ 第三十二講 宇宙人を探
せ クーヨン 二八卷一―号 十月

座談会 食と建築をめぐる対話① 藤原辰史×正田智樹 正
田智樹著『フードスケープ 図解 食がつくる建築と風
景』 学芸出版社 十月

淡水と酸素―歴史観をめぐる対話 河口からⅨ 十月

羅針盤 中東の惨事 もつと背景報道を

山陰中央新報 十月十五日

座談会 藤原辰史×中原一歩 寄せ場と「縁食」 中原一歩
著『寄せ場のグルメ』 潮出版社 十月

チンプンカンブン大学教育学部ゼミ 第三十三講 市長を育て
る クーヨン 二八卷一二号 十一月

座談会 食×対論Ⅰ 藤原辰史×門上武司 門上武司著『別
冊あまから手帖 食べる仕事 門上武司』

クリエテ関西 十一月

●食べものはどこからきたの? (監修) はるぷ出版 十一月
チンプンカンブン大学教育学部ゼミ第三十四講 天井のない牢
獄 クーヨン 二九卷一―号 十二月

コロナ禍の給食と子どもたち 子どものからだと心白書二〇
二三 十二月

花森安治の言葉と私たち 花森安治の言葉 十二月

二〇二三年下半年読書アンケート

図書新聞 十二月二十三日
書評 バシール・バシール、アモス・ゴールドバーグ編『ホ
ロコーストとナクバ』／成相肇『芸術のわるさ』／山家悠平

『生き延びるための女性史』

共同通信配信(北日本新聞他多数) 十二月二十三日
カフカ、官僚文学のために 現代思想1月臨時増刊号 五一卷一七号 十二月

二種類の昆虫食 TOMOLLO FIELD ECHO 2023 あした
の畑―丹後・城崎 十二月
崩れた瓦礫のまえで 熱風(ジブリ) 十二月

●食べる たくさんのおしぎ 二〇二四年一月号 四六六号
エディブル・プラネット 一月

THE BIG ISSUE 四七〇号 一月

チンプンカンブン大学教育学部ゼミ 第三十五講
改めて問う持続可能 クーヨン 二九卷二―号 一月

イスラエルを非難する 農業協同組合新聞 一月十日
史料としてのマニニアル 歴史科学協議会編『深化する歴史
学』 大月書店 一月

もれる―膜が食い破られること 酒井朋子・奥田太郎・中村
沙絵・福永真弓編『汚穢のリズム きたなさ・おぞまし
さの生活考』 左右社 一月

チンプンカンブン大学教育学部ゼミ 第三十六講 スポーツと
は何か クーヨン 二九卷三―号 二月

書評 スコット・レイノルズ・ネルソン『穀物の世界史』
日本経済新聞 二月五日

羅針盤 「一党独裁」の要因明らかに

山陰中央新報 二月十八日

ドイツ現代史研究の取り返しのつかない過ち

長周新聞 二月十九日

座談会 ガザ虐殺の歴史的背景紐解く

長周新聞 二月二十一日

第一次世界大戦期ドイツの農村女性

ジェンダー研究 二六号 二月

座談会 画一化する社会に潜む問題点 佐藤優著『天才たちのインテリジェンス』 ポプラ新書 三月

座談会 労協法で面白い時代が始まる

日本労協新聞 三月五日

座談会 戦争から『食』を考える 平松洋子『酔いどれ卵とワイン』 文春文庫 三月

インタビュール 共に食べる共同体としての「エコビレッジ」

生きる、を耕す本 一号 三月

美学的課題としての食と農―歴史から学ぶ―(前編)

愛農 八八〇号 三月

船山 徹

●梵網経…今こそ活かす梵網戒

臨川書店 四月

●唯識…これだけは知りたい(共著)

法蔵館 四月

“The Chinese Mādhyamika Commentator Jizang’s Reference to Orthodox Philosophical Schools in India, with Special Attention to “Mīmāṃsaka.” In Matsuo, Hiroko, Shinya Moriyama, and Tyler Neill (eds.), *To the*

Heart of Truth: Felicitation Volume for Eli Franco on the Occasion of His Seventieth Birthday. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

二〇一三年

“Reconsidering the Phrase *na kvacit praisisham citam utpadyityam* in the *Vajracchedikā*, with Special Reference to the Chinese Translations.” In Eltschinger, Vincent, Jowita Kramer, Parimal Patil, and Chizuko Yoshimizu (eds.), *Burlesque of the Philosophers. Indian and Buddhist Studies in Memory of Helmut Krasser*. Hamburg Buddhist Studies Series. Bochum/Freiburg: Projekt Verlag. 二〇一三年

(共著) 梁武帝「断酒肉文」訳注

二〇一三年

盧舍那の可視性と立像 外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす…東アジアの思想・文物・藝術』 勉誠社 三月

古松 崇志

契丹の祭山儀をめぐって―遊牧王朝における男女共同の天地祭祀 伴瀨明美・稲田奈津子・榊佳子・保科季子編『東アジアの後宮』(アジア遊学二八三) 勉誠社 六月
契丹(遼)と西遼、女真(ジュルチェン)と金 小松久男編『中央ユーラシア文化事典』 丸善出版 六月
金国の祭天儀礼―拝天と郊祀をめぐって

●東洋史研究 八二巻三号 十二月
ユーラシア東方の多極共存時代—大モンゴル以前

名古屋大学出版会 二月

宮 紀 子

モンゴル時代史鶏肋抄 (二二) まず跪いて拝め

究 一四五 四月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二三) 酒宴におけるエチケット

究 一四六 五月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二四) 追風おいてに帆かけて大都へと

究 一四七 六月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二五) カアンの絡繰時計(上)

究 一四八 七月

奇なる書の道『ユリイカ』八〇六(五五—九)「特集…奇書の世界」
青土社 七月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二六) カアンの絡繰時計(下)

究 一四九 八月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二七) もしもし、亀よ、亀さんよ

究 一五〇 九月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二八) 趙良弼と儒学校

究 一五一 十月

モンゴル時代史鶏肋抄 (二九) 文天祥の実像

究 一五二 十一月

大モンゴル国イェケウルスからみたヨーロッパ『西洋史研究』新輯第五
東北大学西洋史研究会 十一月
二二号

モンゴル時代史鶏肋抄 (三〇) ある南宋遺臣の物語

究 一五三 十二月

モンゴル時代史鶏肋抄 (三一) 鮮于枢の直筆原稿

究 一五四 一月

モンゴル時代史鶏肋抄 (三二) アラクカン家から眺める帝室の攻防(上)

究 一五五 二月

モンゴル時代史鶏肋抄 (三三) アラクカン家から眺める帝室の攻防(中)

究 一五六 三月

宮 宅 潔

「算賦」の誕生 中国出土資料研究 二七号 七月

嶽麓(伍) 48—51簡所見「嬰筭多者爲殿」小考—秦代考績制度之一斑 法律史訳評 一一巻 十一月

岳麓書院所藏簡《秦律令(貳)》訳注稿 その(一)(共訳)

東方学報 九八冊 十二月

●暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討(編著)

科研費報告書 二月

征服軍の撤退…里耶秦簡よりみた占領統治の展開 宮宅潔編

『暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討』

科研費報告書 二月

戦争と貨幣…秦の占領統治と半両銭の流通 宮宅潔編『暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討』

科研費報告書 二月

陳偉「秦簡牘「執法」新釈—秦代の郡に対する評価を兼ねて—」解説
古代文化 七五巻四号 三月

向井 佑介

瓦と文字 日本漢字学会編『漢字文化事典』

丸善出版 十二月

仏塔と仏舎利の東伝 宮治昭・肥田路美・板倉聖哲編『アジア

ア仏教美術論集 東アジアⅦ アジアの中の日本』

中央公論美術出版 十二月

曹操高陵出土石牌銘校注（共著）

東方学報 九八冊 十二月

古代中国の墓と靈魂のまつりー前漢時代における墓と廟の変

革 史林 一〇七巻一号 一月

Changes in the Burial System from the Han to Chin Pe-

riods: With a Focus on Large Tombs of the Tsao Wei

Discovered in Recent Years. ACTA ASIATICA 126. 二月

漢魏晋墓の神坐と墓主圖像―墓のなかの「見えるもの」と

「見えないもの」 外村中・稲本泰生編『見える』ものや

「見えない」ものをあらわす―東アジアの思想・文物・藝

術』 勉誠社 三月

村上 衛

書評 菊池秀明『越境の中国史―南からみた衝突と融合の三

〇〇年』 中国研究月報 七七巻八号 八月

書評 籠谷直人・川村朋貴編『近代東南アジア社会経済の国

際的契機』 華僑華人研究 二〇号 十一月

開埠後廈門海関銀号与外商的糾紛―洋銀与紋銀総付

経済社会評論 二〇二三年四月 十二月

●アジア経済史 上（共著）

岩波書店 一月

●日本経済の比較史（共著）

放送大学教育振興会 三月

書評 金子肇『近代中国の国家と商人―税収と同業秩序のダ

イナミクス』

法制史研究 七三号 三月

森本 淳生

●翻訳 ミシェル・ジャルティ『評伝 ポール・ヴァレリー』

（共訳） 水声社 六月

●翻訳 ジャック・ランシエール『文学の政治』

（共訳） 水声社 六月

翻訳 アンリ・ド・レニエ「何者かが〈夕べ〉と〈希望〉を

夢想する」（『やながら夢の中』所収）翻訳の試み（共訳）

日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」（https://

www.paul-valery-japon.com/blog） 八月

●Les Revies de Retif de La Bretonne ― Subjectivités, gé-

néalogies, morales. Actes du colloque international fran-

co-japonais (Institut de Recherches en Sciences hu-

maines de l'Université de Kyoto, les 22-23 février

2023). Atsuo Morimoto et al. (eds.) *Études rétrospectives*

55 十二月

〈シーン〉、あるいは、共存の空間 日本ヴァレリー研究会ブ

ログ「Le vent se lève」（https://www.paul-valery-japon.

com/blog） 十二月

〈窓〉とフィクション―ジャック・ランシエール『文学の政

治』の余白に

コメット通信 四二号 一月

感覚＝運動サイクル、錯綜体、詩的創造―ヴァレリー『詩学講義』(ウィリアム・マルクス編、ガリマール、全二巻、二〇二三年)をめぐる

ヴァレリー研究 一一号 三月

矢木 毅

高麗武臣政権の百年『アジア人物史』4 集英社 六月

Five Historiographical Trends in the Postwar Japanese Study of Joseon History. *Seoul Journal of Korean Studies* 36(2), Ilsoo CHO et al. 十二月

●続・漢籍の遙かな旅路(共著) 研文出版 二月

安岡 孝一

Sequence-Labeling RoBERTa Model for Dependency-Parsing in Classical Chinese and Its Application to Vietnamese and Thai ICBIR 2023: 8th International Conference on Business and Industrial Research 五月

総会講演要旨『AI(人工知能)は漢文を読めるのか』

岸高同窓会報 第三三三号 六月

単語間に区切りのない書写言語における係り受け解析エンジンの開発 学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点第十五回シンポジウム 七月

アイヌ語訳『五倫名義解』Universal Dependencies 並行コーパスへの挑戦 東洋学へのコンピュータ利用第三六回研

究セミナー

七月二八日

形態素解析・係り受け解析AIにおけるデータ管理とデモ環境の統合 研究データエコシステム構築事業シンポジウム 二〇二三 九月

ローマ字・カタカナ・キリル文字によるアイヌ語 Universal Dependencies の可能性 Evidence-based Linguistics Workshop 2023発表論文集 九月

『日本書紀』Universal Dependencies への挑戦 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 十二月

『蝦夷島奇観』における漢訳アイヌ語について 日本漢字学会第六回研究大会予稿集 十二月

『學文化字典』の異体字 東洋学へのコンピュータ利用第三七回研究セミナー 一月十九日

楊 維公

和刻本『板橋雜記』的刊印及其意義 海峡人文学刊 二〇二三年第四期 十二月

李 媛

古辞書研究とDHにまつわる体験からみえたこと

人文情報学月報 第一四七号 十月

TEI Lex0を利用した日本古辞書の構造化記述 東洋学へのコンピュータ利用第三七回研究セミナー 一月十九日

人

文

第七一號

二〇二四年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品